ライオン誌10月号 2009年（平成21年）9月20日発行
昭和33年12月19日付第3種郵便物認可
毎月1回20日発行第52巻第4号

THEME 骨髄移植

白血病、再生不良性貧血といった病気に苦しむ人々の命を救う骨髄移植。
移植を受けた患者と、骨髄を提供したドナーのそれぞれの立場でかかわった
会員２人の体験談から移植の現状を知る。

ライオンズクエスト・プログラムの25周年を祝おう

ライオンズクエストは1984年のプログラム開始以来、今年で記念すべき25周年を迎えました。現在までに世界50カ国、1,100万人以上の青少年が、このプログラムによってライフスキル（生きる力）を学んでいます。日本でも2000年のパイロット事業スタート以来、北は北海道から南は九州・沖縄まで、多くの地区でプログラムが実施されています。

THE LION MAGAZINE IN JAPAN
October 2009, Vol.53 No.4

We Serve CONTENTS

2009年10月号　表紙
石川県輪島市
千枚田
写真／鈴木秀晃
■詳細はウェブマガジンで
https://www.thelion-mag.jp

MESSAGE FROM THE PRESIDENT

革新の精神を追求しよう

電球や蓄音機を発明した偉大なるトーマス・エジソンは、この革新が現代生活の試金石となることを知っていました。彼は「もっと良い方法があるはずだ。それを探そう」と主張しました。幸い私たちライオンズは今も完璧な奉仕組織です。地域社会に奉仕したいと願うなら、ライオンズに加わるのが最良の方法でしょう。それでも、私たちは常に自らの行動を見直し、折に触れて新しいプログラムや方法を取り入れなければなりません。前進とは新たな道を切り開くことでもあるのです。

革新は成長と共に、私の任期における試金石となるでしょう。本年度は初めて国際青少年音楽コンクールが開催されます。また、「ライオンズ・イン・サイト」はライオンズをPRする新しい取り組みです。第2副地区ガバナーの役職とグローバル会員増強チーム（GMT）を設けたことも、意欲的な試みです。銀杏賞その他のアワード・プログラムは、革新を表彰し促すものとなるでしょう。私たちは今年も変わらぬ奉仕活動を行いますが、同時にその範囲を拡大し、会員の意欲と熱意を徹底的に活用することになるはずです。

私たちはまた、会員についてもっと柔軟に考える必要があります。女性会員の数は26万人近くに達しており、全体の約20％を占めています。しかし、多くのクラブは女性、特に会員配偶者の招請に、これまで以上の努力をすべきです。現在どんなに多くの女性会員が存在しようと、更なる増加がクラブの活性化に効果をもたらすことは明らかです。皆さんのクラブもそのことを理解してくれるものと信じています。

革新は私ではなく皆さんにとって重要なことなのです。私たちは基本的な理念に忠実であるべきですが、改革をためらってはなりません。未来はそれを築き上げる人々のものです。それぞれのクラブと地域社会において、創造性とひらめきを追求してください。すばらしき革新は大勢の人々を引き付けます。彼らは新しく刺激的な何かに参加したいと願っています。皆さんの家族、友人、隣人たちは、ライオンズの行事に出席し、自らもその一員として奉仕に加わりたいと願うようになるでしょう。

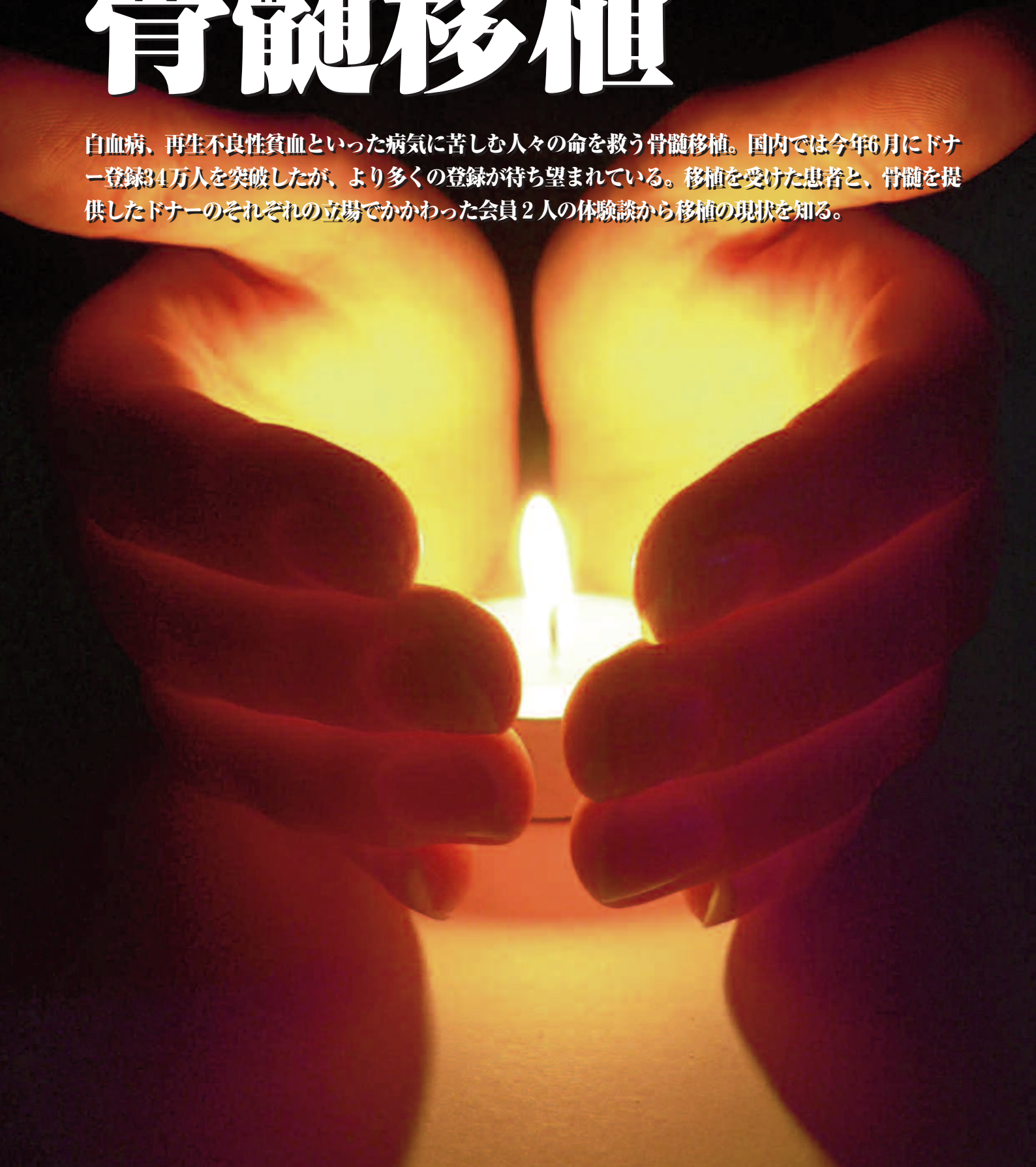
ライオンズの皆さん、本年度のテーマ「Move to Grow」を推進してください。90余年前、創設者メルビン・ジョーンズは「実業家のクラブ」という既成概念をくつがえし、ライオンズの目的を自己の利益ではなく奉仕に置きました。変革という彼の遺産は、今の私たちに啓示を与えてくれます。ライオンズには偉大なる歴史がありますが、過去の土台の上に更に積み上げていくためには、自らを驚嘆すべき革新的な試みの出発点に置くことが必要です。

2009-10年度国際会長
エバハルト・J・ヴィルフス

写真説明：トウモロコシの迷路を作り、知名度の向上に役立てるウィスコンシン州シェルレークのライオンズ。創造性はクラブを強化し続けるために有効である

THEME

骨髄移植

自血病、再生不良性貧血といった病気に苦しむ人々の命を救う骨髄移植。国内では今年6月にドナー登録34万人を突破したが、より多くの登録が待ち望まれている。移植を受けた患者と、骨髄を提供したドナーのそれぞれの立場でかかわった会員２人の体験談から移植の現状を知る。

ドナーは命のボランティア

移植例数1万例を超えた日本骨髄バンク

60%にとどまる移植率

かつては不治の病だった白血病などの血液難病に、骨髄移植による治療が始まったのは、日本では1960年代のことだ。91年には骨髄移植推進財団（日本骨髄バンク／JMDP）が設立されて、93年1月に第1例目の非血縁者間骨髄移植を実現。それから今年7月末までにJMDPを介した骨髄移植例数は、1万7759例となった。

医学の進歩によって、骨髄移植の現場にもさまざまな変化が起きている。以前は移植を受ける患者に最も多かったのは慢性骨髄性白血病だったが、新薬の登場によって、この病気による移植数は大幅に減少した。また、さい帯血移植や末梢血幹細胞移植など、骨髄以外から造血幹細胞を採取する方法も多様化し、患者の病状や条件に合った選択が行われている。

国内で骨髄移植を必要とする患者数は年間約2千人と推計されている。移植は白血球の型であるHLAが一致するドナーがいて初めて可能となる。家族にドナーが見つかるのは2～3割ほどで、その他の人たちは骨髄バンクを通じて非血縁者のドナーを探さなくてはならない。

今年7月末で、日本のドナー登録者数は34万1818人に上っている。日本骨髄バンクではドナー登録者が30万人いれば9割の患者に提供者が見つかると試算し、これを目標としてきた。だがドナー登録者が30万人を超えて、国内登録患者のHLA適合率（一人以上の適合が見つかる確率）が95%となっても、移植率はまだ60%程度にとどまっている。HLAが適合しても、健康状態に問題があり不適格となる場合や、仕事が休めない、家族の同意が得られないなどの理由で辞退する登録者がいるためだ。移植率の向上にはただ登録者を増やすだけでなく、周囲の理解と協力が不可欠。JMDPの働き掛けにより、ドナーに特別休暇やボランティア休暇を適用する企業も出てきている。安心して提供に臨める環境の整備が必要だ。

理解を促す説明員の役割

2000年以降、日本赤十字との連携で全国の献血会場でドナー登録の受付が行われるようになった。しかし受付には骨髄移植に関する説明と登録手続きを行う要員が必要で、その人員がいないために実施出来ない会場も多い。そこでJMDPは骨髄バンク説明員制度を設けている。研修を受けた説明員に委任状と証明書を発行。現在、全国に833人の説明員がおり、それぞれの地域で活動している。

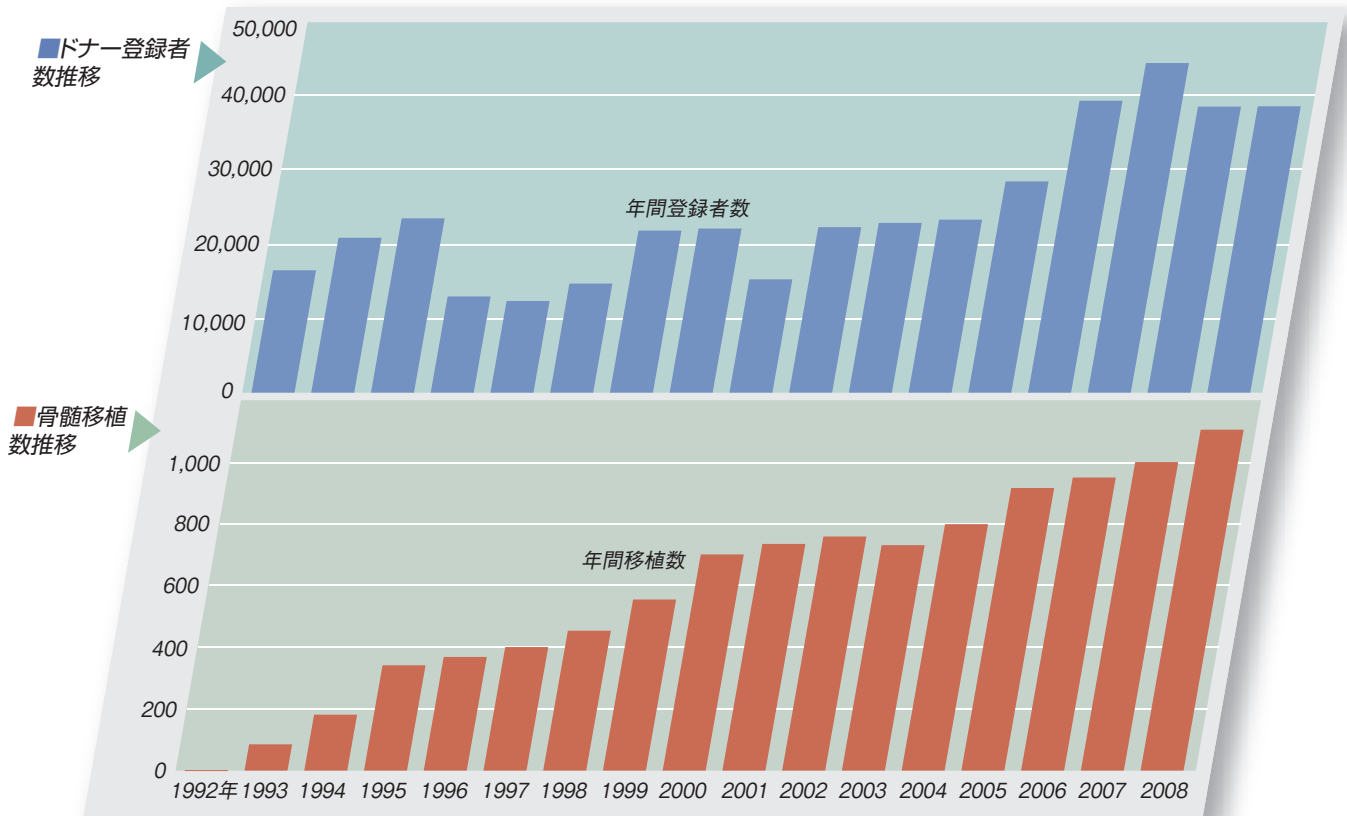
ライオンズでも、330‐A地区（東京）が講習会を開催している他、クラブの活動として養成に取り組んでいるところもある。東京赤羽ライオンズクラブの場合は毎月1～2回、JR赤羽駅前で献血と骨髄バンク登録受付を行い、説明員の認定を受けた会員が説明に当たっている。

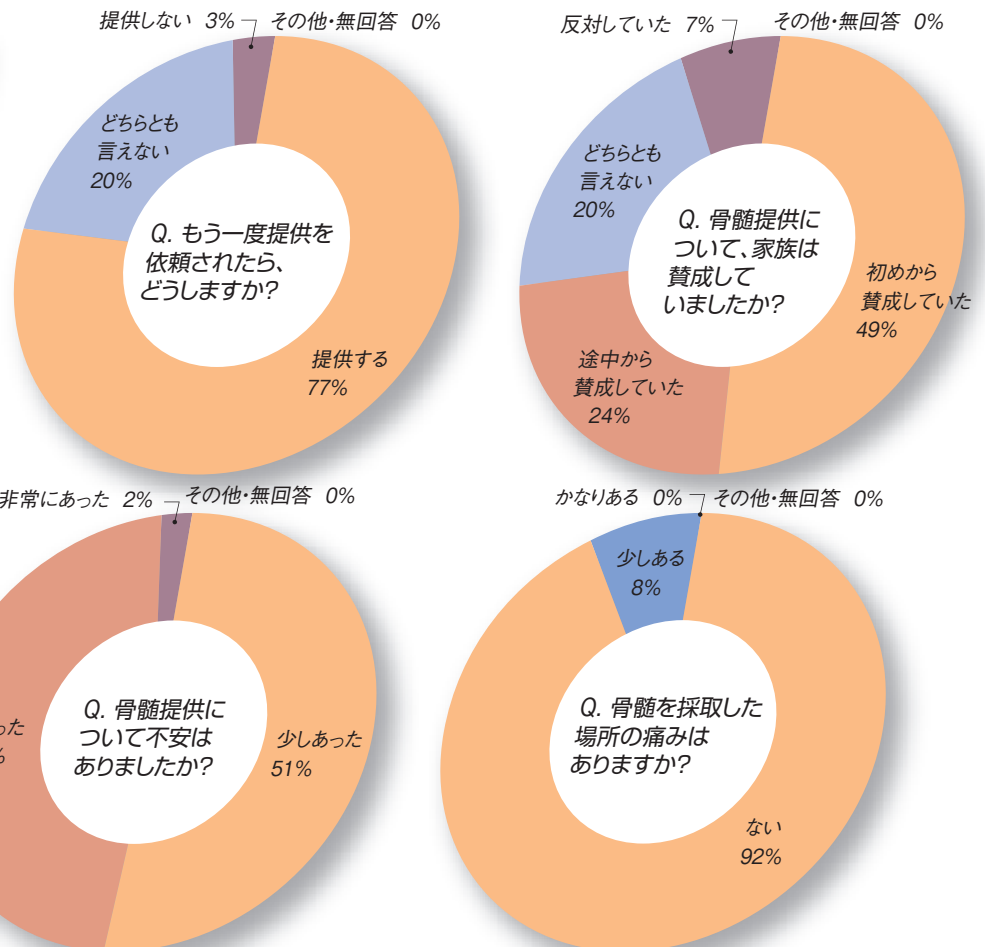
一人でも多くの命を救うために、ドナー登録への理解を深める地道な啓発活動が求められている。

●ドナー登録の要件

- 年齢が18歳以上、54歳以下で健康な人
- 骨髄提供の内容を十分に理解している人
- 体重が男性45㌔／女性40㌔以上の人

＊骨髄を提供出来る年齢は20歳以上、55歳以下
＊ドナー登録後の健康状態によっては、コーディネートを進めることが出来ない場合もある
＊骨髄提供にあたっては家族の同意が必要

日本骨髄バンク：www.jmdp.or.jp/
ドナーズネット：www.donorsnet.jp/

■世界の骨髄バンク登録者数（2009年7月末）

国名	総数
アメリカ	5,141,161
ドイツ	3,438,879
イギリス	708,120
イタリア	326,777
日本	324,266
台湾	280,110
カナダ	243,145
フランス	165,435

（データ：日本骨髄バンク）

●ドナー（骨髄提供者）
木村公一
茨城三和ライオンズクラブ

リスクという現実に直面したドナーと家族の心の葛藤

きむら・こういち
1959年、茨城県三和町（現古河市）生まれ。77年、県立猿島農芸高校卒業。89年、公栄住宅㈱設立。2005年3月、那須大学卒業。07年3月、日本大学大学院理工学研究科修了。同年4月、NPO法人田園生活を支援する会設立。同年9月、茨城三和ライオンズクラブ入会、この月、急性白血病の高校生に骨髄を提供。骨髄移植のドナーとしての体験をまとめた『未来の夢は何ですか？　生きることです。』を自費出版、売上は全額、骨髄移植推進財団へ寄付している。
http://www.tasukaruinochi.com/

2007年2月下旬、ライオン木村公一はNPOの申請をするため、妻の義江さん、長女の絵理雅さんと、水戸市にある三の丸公社（旧茨城県庁）に赴いた。県の担当者と1時間半ほど打ち合わせをして部屋を出た時、壁際の棚に、いくつかの書類が並んでいるのが目にとまった。何だろう？ 近寄ってみると、それはボランティア団体の募集や、臓器移植、骨髄バンクなどのパンフレットだった。ライオン木村は何気なく、骨髄バンクのパンフレットを手に取った。

それは後に、ある高校生の命を救うことになる運命の瞬間だった。

41歳の大学生

2001年、ライオン木村は那須大学都市経済学部（現・宇都宮共和大学シティライフ学部）に入学した。41歳の新入生だった。那須大学には、ライオン木村が所属する㈳全国宅地建物取引業協会との協定により、社会人学生入学特別枠が設けられていた。

自宅から100キロ以上離れたキャンパスで、ライオン木村は長女よりも年下の同級生と机を並べることになった。そして、ここで不動産経営管理や町づくりを研究する松岡勝博教授と出会った。

ある時、松岡教授はこんな話をした。

「木村君、町をつくるというのは町並みをつくることじゃなく、人の考え方をつくっていくことなんだよ。つまり、町づくりというのは、人づくりなんだ」

松岡教授との会話はライオン木村に大きな刺激を与え、以前からぼんやりと考えていた思いに、一つの方向性を示した。

「人生の目標は、人の役に立つこと」

ライオン木村の中で、自分の進むべき道がはっきりと見えてきた。そんなライオン木村に松岡教授は大学院への進学を勧めた。

「人の役に立つための手段として、大学で勉強しただけでは足りないんじゃないかい？ 木村君はどう思う？」

「私もそう思います。大工の木村が何を言っても、町は動きません」

「そう。現実の社会はレッテルがものを言うところがあって、力があっても、レッテルがないと町は動かない」

「じゃあ、レッテルを作りましょう」

05年、ライオン木村は一般受験で日本大学大学院に入学。更に町づくりについて、研究を深めることになる。ここでも、三橋博巳教授、堀越義章講師らとの出会いが、ライオン木村に大きな影響を与え、地域の農業政策や農地の有効活用について活動するNPO「田園生活を支援する会」の設立へとつながった。

骨髄バンクとの出会い

07年2月、NPOの申請先でふと手にした1枚のパンフレット。それは、骨髄バンクのパンフレットだった。小さなもので、ライオン木村はなぜか寂しさを感じた。そして旧茨城県庁の建物を後にし、駐車場へ向かう途中、「このパンフレットで何人ぐらいの人が登録するんだろう？」と考えていた。

中身が気になって仕方がない。そこで、帰りの運転は妻の義江さんに頼み、助手席でパンフレットを読み始めた。骨髄移植の重要性は分かった。が、骨髄バンクやドナーとなった場合のことがよく分からない。車の中からパンフレットの発行元、骨髄移植推進財団に電話をかけてみた。

すると、ドナー登録は献血センターか保健所でとの回答だった。早速、自宅からいちばん近い該当の保健所に電話をした。が、担当者不在のため、翌日、改めて連絡をし、検査の予約を入れた。ライオン木村の中では、ドナー登録をする気持ちが固まっていたのだ。

実はライオン木村は既に、移植のための臓器提供を登録していた。母が膵臓がん

で亡くなったことがきっかけだった。この時、自分の膵臓を提供してでも助けたい。心底そう思った。そのため、同じような境遇の人がいたら役に立ちたいという思いが強く、家族には内緒だったが、すべての臓器について死後の提供を登録していた。

3月中旬、予約を入れたその日、木村は義江さんと共に、下館保健所へ出向いた。担当者の説明に続いて、30分ほどのビデオを見せられた。非常に分かりやすいもので、特に疑問点は思いつかなかった。担当者からは、

「ドナー登録をしても、すぐに提供ということはなく、木村さんの場合、年齢から言っても、まず提供はないと思いますよ」

と言われた。これを聞いて木村も義江さんも、正直ほっとしたという。人は助けたい。でも出来れば適合してほしくない。そんな気持ちだった。

特に木村は、自分だけのつもりだったのが、義江さんも登録をしたため、実は心中穏やかではなかった。義江さんは木村がやることなら、何でも一緒にやりたがった。断る術がなかったのだ。

自分はいいが、妻には提供させたくない。危険な目に遭わせたくない。それが本音だった。

大切なお知らせです

4月中旬、その日は孫の日菜ちゃんの誕生日だった。木村は朝からうきうきとした気分だった。日菜ちゃんの誕生日パーティーのことを考えると、一人でに笑みがこぼれた。仕事を終え、ケーキを買った木村は、いそいそと家路を急いだ。

家に帰ると、居間のテーブルに淡いピンクの封筒が置かれていた。封筒には「大切なお知らせです。至急開封してください」という文字が印字されていた。それを見て、木村はどきっとした。すぐに意味が分かった。急いであて名を確認した。

「木村公一様」とあった。妻の名ではなく、安堵したが、なかなか封筒を開けることが出来なかった。日菜ちゃんの誕生日のことも飛んでいた。それでも、意を決して封を開け、中に入っていた説明書を読んだ。そこには、

「この度、貴方様と骨髄バンクの登録患者さんのHLA型（白血球の型）が一致し、ドナー候補のおひとりに選ばれました」

と書いてあった。意思は既に決まっていた。問題は、家族に理解を求め、同意を得られるかどうかだった。

日菜ちゃんの誕生日パーティーが終わった後、木村は義江さんを散歩に誘った。二人は毎晩、5キロの散歩をしていた。歩きながら話を切り出した。

「おかあさん、実はね、骨髄バンクから手紙がきたんだよ」

「へぇ～、どんな手紙？　私にも？」

「いや、おかあさんにはこない。僕にだよ。HLAの型が合ったよ。白血病の人を助けてくれっていう手紙だよ」

「え～っ！　本当？」

「うん。本当だよ。で、返事を出さなきゃいけないんだよ」

「どうするの？」

「ドナーになります、OKです、と返事をしようと思っているよ」

「そう……。おとうさん、人助けをする運命なんだね。その患者さん、運がいいね。登録してすぐだもの。きっと助かるよ。おとうさんの体力のある骨髄がいけば助かるよ」

「うん、そうだね」

その日は、大事な日菜ちゃんの誕生日であると同時に、木村が人生の目標とする「人の役に立つ」ことの究極、他人の命をつなげるためのスタートラインに立った日だった。「絶対に助けなければ」。強い思いが湧いてきた。

お気持ちに変わりありませんか？

4月下旬、担当コーディネーターから書類とビデオが届いた。ビデオのタイトルは『お気持ちに変わりありませんか？』。内容は骨髄提供手術の様子だけではなく、事故や後遺症の事例も入っていた。一抹の不安がよぎる。が、使命感がそれに打ち勝ち、最後まで直視することが出来た。ただ、家族には見せないことにした。

その後は5月中旬に、最初の確認検査。6月下旬、最終ドナーに決定の通知が届き、7月中旬、2度目の検査が実施された。この日は医師とコーディネーター、それに弁護士立ち会いの下、本人と家族の意思が確認された。

骨髄提供には危険が伴うことが説明され、医師から「何か質問は？」と聞かれた。木村（オンラ）は勢いよく「何もありません。大丈夫です。準備をお願いします」と答えた。が、義江さんは違った。

「危険を伴うと言っても、死ぬことはないんでしょ、先生？　そんなことはないよね？」

今まで、隠していた不安が、口をついて出た。すると医師は「あります」と冷静に答えた。

「事例は少ないですが、ゼロではありません」

義江さんも、分かってはいたが、言葉で聞くとショックだった。義江さんは続けて聞いた。

「後遺症は？」

「これも数は少ないですが、可能性はあります。骨に穴を開けるんですから」

なくても……。嘘でいいから『大丈夫』と答えてくれればいいのに」と思った。

木村（オンラ）は「そんなにばか正直に答え

義江さんは明らかに、同意書に判を押すのをためらっていた。そんな義江さんに、弁護士が言葉をかけた。

「あなたが反対ですと言えば、この提供は取りやめです」

木村（オンラ）にも義江さんの気持ちが痛いほど分かった。逆の立場なら拒否するかもしれない。が、違う言葉が出た。

「おまえ、ハンコ押せよ」

「でも……」

傍らで弁護士も、医師も、「やめてもいいんですよ」と言ってくれている。しばらくして、義江さんがぽつりとつぶやいた。

「この人、言い出したら聞かないから」

同意書が出された。印鑑を持った義江さんの手に涙が落ちた。涙は止まらなかった。

「この時は私も心が揺れました。他人の子を助けるために、家族にこんなに迷惑をかけなくてはいけないのか。私は、良いことをしているのか、悪いことをしているのか。反省と正義の心がぶつかり合いました」

木村（オンラ）はそう振り返る。一方の義江さんは、

「リスクがあると聞いて、不安でいっぱいになってしまって。でも、主人が応じられなければ、そのお子さんが死んでしまう。私が断ったら、後で後悔するんじゃないかって、思ったんです」

と、その時の心の葛藤を話してくれた。気持ちは揺れながらも、二人は同意書に判を押し、骨髄提供に向けてスタートを切った。手術の予定日は9月下旬。医師からは、こう告げられた。

「今後は、あなたの身体はあなただけのものではありません。今日から患者さんは、提供を受けるために放射線治療を始めます。骨髄をすべて失うことになります。あなたに何かあると、患者さんは100％死にます。けがをすることはもちろん、運動もすべてだめです」

見知らぬ高校生の命は、木村（オンラ）の手の中にあった。その日から、白血病の高校生と木村（オンラ）の闘いが始まった。

2時間に及ぶ提供手術

8月下旬から、木村の自己血採血が始まった。週に1回、片道1時間の病院に通わなくてはならない。右手に増血剤を点滴し、左手で採血する。それは、かなり辛いものだった。

採血後は貧血の恐れもあり、車は運転出来ない。義江さんに同行してもらうか、タクシーで往復するしかない。しかも、交通費は自己負担だ。この頃から、木村はドナーの負担が思っていた以上に大きいことが分かった。

9月下旬、いよいよその日がきた。前日に入院し、提供日の朝は4時に起床。下剤を飲み浣腸をする。事前に聞いてはいたが、やはり恥ずかしかった。午前10時、木村は義江さんに見送られて手術室に入った。

手術は約2時間だった。うつぶせに寝かされ、真っ正面から人工呼吸器を着ける。無理な体勢での装着なので、手術後、気付いたら口の中があちこち切れていた。骨髄を抜くのは太い注射針で、これを骨に突き刺し、数カ所に穴を開けて約100回に分けて採取する。木村の場合、約1400ccのうち、900ccの骨髄液を抜かれた。

骨髄の3分の2を失った訳だから、当然、ドナーの免疫も落ちる。普段は気付かないが、木村は蚊に刺された跡が1カ月も治らず、それで実感した。また、1カ月ぐらいで骨髄は回復すると言われたが、1カ月後の検査では数値が完全には戻っておらず、以前より疲れやすくもなっていた。

「本当に体調が戻ったのは半年ぐらいたってからじゃなかったですかね。ただ、それよりも高校生が助かったのかどうかが気がかりでした」

と、木村は話す。

そんなある日、骨髄移植推進財団から、久しぶりに封書が届いた。中には患者の母親からの手紙が入っていた。

「（略）三月に発病し、移植しか方法がないと言われ、家族の検査の結果が不適合と分かり、絶望のどん底にいた時に、先生から適合するドナーの方が見つかりましたと言われた時は嬉しさのあまり泣き崩れてしまいました。大事な息子を救って頂き、そして希望を与えて下さり、本当に本当に感謝しております。（略）」

この手紙を、木村と義江さんは泣きながら読んだ。そして涙で文字がかすむ中、義江さんは何度も何度も読み返すのだった。

（取材／鈴木秀晃）

●元患者／プロゴルファー

中溝裕子

東京ワンハンドレッド ライオンズクラブ

移植と拒絶反応の苦しみを乗り越え、今私に出来ること

なかみぞ・ゆうこ
1965年、滋賀県彦根市生まれ。14歳からプロゴルファーを目指し、88年にプロテストにトップ合格。活躍を期待された矢先の91年に骨髄異形成症候群と診断され、97年12月に妹・千佳与さんの提供により骨髄移植を受けた。激しい拒絶反応を乗り越え、現在はプロゴルファーとして活動するかたわら、講演や闘病生活を支えた絵手紙で骨髄バンク支援に尽くしている。今年6月結成の東京ワンハンドレッド ライオンズクラブチャーター・メンバー。現在、㈱Gcross代表取締役、骨髄移植推進財団評議委員、伊豆食文化公園顧問を務める。『みんながいるから 今があるから』（ホーム社）、『リカバリー！』（新潮社）の著書がある（現在はいずれも絶版）。
http://www.nakamizo-book.com/

「落ち込んだって仕方ない　過去は戻りはしない　そんなもの振り返ったって仕方ない　前進あるのみ　この先素晴らしい　楽しい未来がまっているよ」

骨髄移植後の激しい拒絶反応に苦しみながら、中溝裕子が自分を励ますつもりで書いた筆文字は、共に病と闘う人たちに勇気を与えた。「骨髄移植しか助かる道はない」。そう告げられたのは念願のプロゴルファーになって間もない26歳の時だった。

何か悪いことをした?

それはプロゴルファーになって3年目、1991年初夏のことだった。遠征先のゴルフ場にかかってきた1本の電話が、長く、とてつもなく険しい日々の始まりだった。電話は数週間前に検査を受けた故郷の滋賀県彦根市にある病院の医師からだった。血液に異常値が見つかったので、なるべく早く両親と一緒に病院へ来てほしいという。

試合後、郷里の病院へ行くと、思いも掛けぬ一言が待ち受けていた。

「白血病の可能性があります」

精密検査の結果、告げられた病名は「骨髄異形成症候群（ＭＤＳ）」。10万人に一人の割合で発症する病気だと言われた。「10万人と言えば彦根市の人口とほぼ同じ。えらいクジを引いてしまった」。そんなことが頭をよぎった。

ＭＤＳは血液細胞のがんの一つで、骨髄で正常な血液細胞が作られなくなる疾患群のことだ。骨髄では白血球、赤血球、血小板の3種類の血液細胞の元となる造血幹細胞が作られている。その造血幹細胞が正常に機能しなくなり、作られる血液細胞に形がいびつなものが増えてしまうのがＭＤＳで、結果的に血液細胞が減少しさまざまな症状を引き起こす。原因はよく分かっていないが、遺伝性はなく後天的な要因によるものとされる。年齢と共に発症率が高まり、女性よりも男性により多く認められるのが特徴だ。白血病と同様に、近年は増加の傾向にある。ＭＤＳにはいくつかの種類があって、中溝の場合は「ＭＤＳ-ＲＡ」というタイプで、3種類の血液細胞すべてが減少するものだった。血小板は通常の10分の1程度、赤血球も白血球も、標準的な数値を大きく下回っていた。

こんなに若くて元気な自分がなぜ……。悔しさの一方で、前兆は確かに感じていた。パワーでは誰にも負けないはずだった飛距離が以前より落ちていた。ぶつけた覚えもないのに体のあちこちに青あざが出来たり、キャディバッグを担いだ肩に内出血が出来たのは、血小板が少なくなったため。風邪をひきやすくなったのは、白血球の働きが低下して免疫力が下がったためだった。頭にあるのは試合のことばかりで、体が伝える信号を練習不足のせい、体質のせい、疲れがたまったせいにして見過ごしていた。

ＭＤＳは急性骨髄性白血病に移行する可能性が高い。それまで早ければ1年半、長くても5年ぐらい。医師にはスポーツはあきらめるよう言われた。

「努力してようやく自分の夢をつかんで、未来は明るく光り輝いていたんです。プロとしてこれからという時に神さまはなんてひどいことをするんだろう。自分は何か悪いことをしたんだろうかと、どん底に突き落とされた思いでした」

夢はプロゴルファー

三姉妹の長女に生まれた中溝は、男の子に負けないほど元気で、真っ黒に日焼けして琵琶湖のほとりの野原を駆け回っていた。幼い頃から明るくひ

ょうきんで、人を笑わせるのが大好き。小学生の頃は野球に熱中し、よく父親とキャッチボールをして遊んでいた。

中学生になったある日、父親に連れられてゴルフ練習場へ行き、その楽しさにはまった。テレビで見た森口祐子プロに憧れ、自分もプロゴルファーになると心に決めたのは中学2年の時だ。高校時代はソフトボール部に所属し、基礎体力をつけようとひたすらトレーニングに励み、卒業と同時に森口プロと同じ故井上清次プロの下に弟子入り。19歳で初めてプロテストに挑戦し、7度目でトップ合格を果たして、滋賀県からは初の女子プロゴルファーとなった。こうと決めたらまっしぐらに突き進む強さと、練習で培った体力を武器に、活躍が期待されていた矢先の発病だった。

医師には唯一「骨髄移植」という治療法があるが、日本ではまだ数例しかないと聞かされた。それは中溝が初めて耳にした言葉だった。日本で初めて民間組織の東海骨髄バンクが発足したのが2年前の89年。もう間もなく、公的骨髄バンクが発足しようという時期だった。

すぐに両親と二人の妹のドナー適合検査が行われた。HLA型は両親からそれぞれ半分ずつ受け継ぐため、兄弟姉妹の場合は一致する確率が4分の1で、4人いれば一人は適合することになる。2人の妹のうち、すぐ下の妹の千佳与さんと型が一致していることが分かった。

「私からはドナーになってほしいというような話はしませんでした。注射針さえ怖がる妹にそんな重荷を背負わせたくなかった。家族には迷惑をかけたくない、困難は自分一人が背負えばいいという気持ちが強かったんです。適合がすぐに見つかったので、その時はこんなものなんだと思いました。後になって、非血縁者では数百万分の1から数万分の1の確率だと聞き、自分は本当にラッキーだったと知りました」

気力で打ち勝ってやる

幸運にも身内に適合が見つかった中溝だが、実際に骨髄移植を受けたのはそれから6年も後のことになる。本人が移植に難色を示したこともあり、とりあえずは病状を見守ろうということになった。既にドナーが見つかっている安心感もあった。一度は深く落ち込んだ中溝だが、限られた時間でも精いっぱい自分らしく生きたいとゴルフを再開。それから症状が悪化した後も家族には告げず、ギリギリのところまでクラブを手離さなかった。

いつ取り返しのつかない事態になるか分からないのに、移植を先延ばしにしたのはなぜなのか。

「私にはゴルフがすべてだったんです。ゴルフのない人生なんて考えられなかった。もしかしたら奇跡が起きて病気が消えてなくなるかもしれない、新しい薬が出来るかもしれない。でも移植が失敗したら二度と出来なくなってしまう。そうなるぐらいなら、クラブを握ったまま死んでもかまわないという心境でした。本当に無謀で、無茶苦茶です。でも、絶対に治るという気力で病気に打ち勝ってやると本気で考えていた。ゴルフをしていれば病気のことは忘れていられたので、今思えば恐怖から逃げていたのだと思います」

病状はしばらくは安定していて、ゴルフに打ち込む日々が続いた。MDSの診断から4年目の95年1月、新天地で新たなチャレンジをしようと地元彦根から千葉県内のゴルフクラブに移籍。その年はトーナメント出場が決まっていて、練習にも気合いが入っていた。しかし、とうとう身体が悲鳴を上げ始めた。体力が落ちて、試合での1日目は気力で持ちこたえても、2日目には

疲れて大きくスコアを落としてしまう。日常の生活にも支障が出て、東京の病院で診察を受けることになった。

病状は以前より進行していた。それでも試合に出たいという訴えに、医師も根負けしたのか輸血を受けることを条件にした。初めは月1回だった輸血はやがて週1回、週2回になり、やがて血小板輸血も始まった。医師には血小板の輸血が必要になったら、移植しなければならないと言われていた。

それでもまだ踏み切れなかった中溝に、移植を決断させたのは大相撲の阿武松親方（元関脇・益荒雄）の言葉だった。おかみさんが女子プロゴルファーの先輩だった縁で部屋を訪ね、その日初めて親方に会った。

無菌室開放を看護師さんたちと共に喜ぶ

「何でこのチャンスをものにしないんだ。生きてゴルフがしたくないのか」

それまでに親にも友人にも言われ続けていたことだったが、親方の言葉は不思議と魂に響いた。

妹にもらった命

移植の日は97年12月3日に決まった。その1カ月前からさまざまな検査を受け、虫歯を始め体中の悪いところはすべて治療した。移植前後は感染症に掛かりやすい状態になるためだ。胃や腸も消毒液で殺菌して、移植の8日前からはガラス張りの無菌室へ。看護師も中に入れないので、点滴のため胸の静脈に挿入したカテーテルの消毒や薬剤投与も自分で行わなければならない。

移植の前処置は辛く過酷なものだった。がん細胞を根絶し、免疫細胞を破壊するために致死量に相当する大量の抗がん剤が投与される。中溝の場合は2種類で、最初の薬剤では「これなら楽勝」と思った。だが二つ目の薬剤の注入が始まると強烈なだるさで動くこともままならず、体が蝕まれていくのを感じた。それが終わると抗がん剤を洗い流すウォッシュアウトが行われて準備が完了。体はもうぼろぼろの状態だった。

「妹さんの骨髄が来ましたよ。これから移植しますね」

インターフォンを通じて看護師の声が聞こえ、運ばれてきた千佳与さんの骨髄は真っ赤で、見た目には輸血用の血液と変わりなかった。点滴と同じ要領で、骨髄の入った透明なバッグを胸の管につないだ。

「妹がくれた命が一滴一滴と自分の身体に入っていくのを感動的な思いで見つめていました。家族と看護師さんたちに見守られながら、移植は5時間ぐらいで終わりました。後は妹の骨髄が私の身体を気に入ってくれればいい。もう大丈夫だと思いました」

東京ワンハンドレッド ライオンズクラブの認証状伝達式で記念講演

移植から1週間がたって、白血球の数値が順調に上がり始めた。数値が千を超えれば、無菌室を出られる。中溝は移植から12日間という異例の早さで無菌室から開放された。順調にいけば3カ月後には退院出来るはずだったが、試練はまだ終わっていなかった。

移植医療では拒絶反応をコントロールすることが重要な鍵となる。拒絶反応とは、一般的には患者の免疫細胞が移植された臓器を異物と見なして攻撃することを言う。骨髄移植の場合に問題になるのは、ドナーの免疫細胞が患

者の体を異物と見なして攻撃する移植片対宿主病（GVHD）だ。

中溝にはそれが口に出た。口中のGVHDは治るまでには2年から3年掛かる。粘膜が炎症を起こしてただれ、口を開くことさえ出来ない。移植から更に2年半続いた入院中、口から物を食べることが出来ずに点滴で命をつないだ。GVHDの影響は体中に出て、絶え間ない激痛を鎮痛剤で抑えながら、時間の経過を待つしかなかった。

「絶対に元気になってごはんを食べ、ゴルフをしてやる、そう信じていました。あの時くじけていたら、免疫力が下がって今の私はなかったはずです。あの辛い状態をどうやって忍耐強く過ごせたかと言えば、妹の命が一緒だったからです。妹の骨髄が私の中で血液を作ってくれている。二人分の命を背負った私が、痛いとか、お腹が空いたとか愚痴は言っていられないと、そう思っていました」

今の自分に出来ること

闘病に大きな力をくれたもう一つのものが、絵手紙との出会いだ。見舞いに来た伯母に勧められたのがきっかけだった。思い浮かぶまま書き連ねた言葉を、看護師が談話室に張り出した。

骨髄バンク支援2010年絵手紙カレンダー（卓上）。代金の一部が患者負担支援基金に寄付される
（読者プレゼント→56ページ）

「他の患者さんたちが『励まされた。元気をもらった。一緒にがんばっていこう』と言ってくださって、本当にうれしかった。ゴルフしか出来ないと思っていた自分が人を勇気づけることが出来る。それまでに味わったことのない喜びでした。病院で過ごした3年はかなり長かった。でもその経験がなければ、多くの人たちとの出逢いもなかったわけです。自己中心的でわがままだった私が、病気をきっかけにたくさんのことを学ばせてもらいました。人生で大切なのは、いかに人を元気にして喜ばせることが出来るか、という奉仕の心なのだと」

入院中、同じ病棟で病と闘う何十人もの仲間がこの世を去っていった。高齢で移植を受けられなかった人もいれば、移植後に命を落とした人もいる。そしてドナーが現れるのを待ち望みながら願いがかなわなかった人もいた。

「骨髄バンクには現在、34万人のドナー登録者がいらっしゃいますが、それでも移植を待つすべての人を助けられません。残念なことですが、HLAが適合してからドナーを辞退される方が多いんです。仕事の都合もあるかもしれないし、家族に反対されることもあるでしょう。でも患者にとってはドナーの善意が命をつなぐ唯一の希望なんです。必要なのは何としても患者の命を救おうという30万人なんです」

GVHDを乗り越えた中溝は、一人でも多くの人に骨髄移植について正しく理解してもらおうと体験を著書にまとめ、講演活動も行ってきた。移植から10年目を迎えた07年12月3日には、命あることの感謝を伝えたいと「中溝裕子骨髄バンクチャリティー・コンペ」を開催。以来、骨髄バンクへの理解を広めるために毎年続けている。今年5月には、組織的に骨髄バンク支援に取り組もうと女子プロゴルファーの仲間の協力を得て会社を設立した。女子プロとの架け橋となって愛するゴルフの発展に尽くしながら、骨髄バンクの啓発や支援を行うことにしている。

「私に出来るのは命の大切さを伝えること。今、年間に3万人以上の人たちが自ら命を絶っています。そんな今だからこそ、ごはんを食べられることの喜び、生きることの素晴らしさを伝えたい。皆さんの魂の輝きに貢献すべく、メッセージを発信していきたいです」

プロゴルファーを目指した日々のように、中溝は今日もまっしぐらに歩み続ける。

（取材／河村智子）

pick up ピックアップ

クラブ合併

クラブ活性化とライオニズムの存続を目指した選択

ここ数年、会員数が減少し、単一クラブの体力が落ちつつある中、クラブの活性化や、地域社会におけるライオンズの存続を目指して、合併を選択するクラブが散見されるようになった。そのうち4クラブでの合併を模索し、最終的には今年6月、3クラブが合併して誕生した兵庫県・神戸みなとライオンズクラブ（堀口清隆会長／47人）の例を中心に、日本におけるこの1年間のクラブ合併の動きを追ってみた。

（取材／鈴木秀晃）

今回の神戸市内3クラブによる合併劇で、中心となったのは、旧・神戸湊川ライオンズクラブだった。同クラブは1968年11月、神戸甲南ライオンズクラブのスポンサーで誕生、昨年度、結成40周年を終えたクラブだ。その40年の歴史の中には、忘れられない悲しい記憶がある。

大きな転換点となった阪神・淡路大震災

1995年1月17日に発生した兵庫県南部地震により、神戸湊川ライオンズクラブは2人の会員を失った。1年理事のライオン板野与志育と、ライオン冨永龍心だ。

ライオン冨永は須磨寺の塔頭である蓮生院の住職で、長女の直子さん（当時7歳）と一緒に屋根の下敷きになった。10人の若い僧が、30分がかりで直子さんを助け出した。ライオン冨永は倒れかかった戸板を支え、愛娘を右手でかばったまま息絶えていた。残った会員も、58人のうち17人が自宅や事業所を失った。

この阪神・淡路大震災による倒壊家屋は10万戸以上、神戸市内では各所で火災が発生し、広い地域でライフラインがストップした。死者6400人以上、4万人が負傷し、34万人が学校・公園などに避難する未曾有の被害をもも

たらした。ライオンズでも5人の会員と44人の家族が犠牲となった。

今回、合併の話を伺う中で、3クラブの関係者は異口同音に、この阪神・淡路大震災が転換点だったと語った。

「今では考えられないことですが、震災前までは、60人という定員を設けていました。震災でお二人が亡くなり58人になりましたが、残った会員が一人も欠けることなく4年後の30周年を迎えようというのが、当時の最大の目標でした」(ライオン其浦宏次／元地区ガバナー／旧・神戸湊川ライオンズクラブ)

「ただ、既にバブルが崩壊し、経済的にも厳しい状況にあったため、当初は何とか持ちこたえたものの、何年かたつうちに歯が抜けるように会員が減っていきました」(ライオン谷垣正彰／旧・神戸湊川ライオンズクラブ08年度会長)

これは合併に加わった神戸すずらん、神戸北野の両クラブも同様だった。

「当時、クラブには67人いたんですが、震災後は坂道を転げ落ちるように会員が減りました。結局、残ったのは7人。実は昨年度、解散する予定でいたんです」(堀口会長／旧・神戸すずらんライオンズクラブ08年度会長)。

系列クラブ同士による合併話

今回、合併に参加した3クラブは同じ系列にある。

1968年に誕生した神戸湊川ライオンズクラブは、5年後の73年に神戸ノースライオンズクラブをエクステンション。76年、その神戸ノースライオンズクラブのスポンサーで結成されたのが神戸すずらんライオンズクラブ、更に89年、神戸すずらんライオンズクラブにより神戸北野ライオンズクラブが生まれた。3クラブはいわば親、孫、曽孫の関係だった。

合併の話が持ち上がったきっかけは、神戸すずらんライオンズクラブの解散決議だった。

「07年度に会員数が一桁になり、前年度は1年かけて解散の準備をしました。アクティビティ先やゾーン内のクラブへのあいさつ回りなどを行い、年度末に解散の予定でした」(堀口会長)。

最初に話をしたのは子クラブに当たる神戸北野ライオンズクラブだった。

「正直動揺しました。いろいろ相談していた親クラブがなくなったらどうなるのか。私たちも会員数は11人。2、3年はいいが、先行きはかなり厳しいのでは、と」(ライオン中山敏治／旧・神戸北野ライオンズクラブ08年度会長)。

そんな中、神戸湊川ライオンズクラブが動いた。クラブとしての存続は難しいかもしれないが、メンバーには何とかライオンズに残ってほしい。そこで神戸ノース ライオンズクラブも交えて4クラブで協議し、数クラブによる合併を模索することになった。当初は神戸湊川(25人)、神戸ノース(22人)、神戸すずらん(7人)、神戸北野(11人)の4クラブによる新設合併が目標だった。

「前期、40周年を迎えた当クラブも会員数が減少し、例会に出てくるのは15人程度。メーンとなって活動するのは6、7人という状況でした。若手はそれなりにいるんですが、阪神・淡路大震災後、中堅層が抜けてしまったのが痛手でした」(ライオン谷垣)

そのため、神戸湊川ライオンズクラブは若手もベテランも、合併話には前向きに取り組んでくれた。が、肝心なのは神戸すずらんライオンズクラブの反応だ。

「実際は解散を機にライオンズを辞めようと考えていた人がほとんどでしたが、合併の話を頂いて、心機一転、もう一度がんばってみようという方向にまとまりました」(堀口会長)

もう一つの神戸北野ライオンズクラブは、18年継続しているアクティビティ「手話シャンソン」が気がかりだった。

「この看板アクティビティだけは、何としてでも続けたい。それさえクリアしてくれれば、というのが私たちの条件でした」(ライオン中山)

2009年1月から4月にかけ、関係者による話し合いが持たれ、さまざまなアイデアが出された。その段階では、企業で言う吸収合併、自治体における編入合併ではなく、新設合併を目指していた。2009年1月10日には、4クラブによる新年合同例会が開催され、例会前に各クラブの会長が集まって打ち合わせを行った。

結果的に、神戸ノース ライオンズクラブはクラブ会員の総意が得られず不参加となったが、合同例会の席で3クラブによる合併のための準備委員会設立が発表され、実現に向けて最終調整に入ることとなった。

新しい絵を描き始めるために

　まずクラブ名だが、単純に3クラブをつなげる「神戸湊川すずらん北野」では、どうにもおかしい。考えあぐねている時、其浦ガバナーの下でキャビネット会計を務めたライオン松本晃一が、「神戸みなと」はどうかと提案。港町神戸という代名詞があるにもかかわらず、なぜかこれまでその名を冠するクラブがなかったため、この提案はすんなり通り、「湊川」の「川」が取れ、「ひとかわむけた」という関西風オチまでついて新クラブの名前が決定した。

　アクティビティに関しては、これまで3クラブが実施していたものを新年度はそっくりそのまま行うことになった。もちろん次年度以降は、事業内容を精査の上、取捨選択が行われるだろうが、手話シャンソンについては、神戸湊川、神戸すずらんに所属していた会員たちも、その意義を認めており、実は今年度のメーン事業に据えたほど。これで、神戸北野ライオンズクラブの懸念が解消された。

　事務局は、神戸すずらんが解散のため既に廃止を決めていたし、神戸北野は数年前から事務局員を置いていなかったため、神戸湊川の事務局をそのまま継承。例会場は第1例会が神戸すずらん、第2例会は神戸北野が、それぞれ使っていたホテルを使用することになった。ばらばらだった年会費は仕切り直しを行い、3クラブがそれぞれ決めていた金額より大幅に減額した。

　こうして6月30日、3クラブの合併例会が開催され、旧・神戸湊川ライオンズクラブ旗のライオンズ・マークをリフォームした「神戸みなとライオンズクラブ旗」が、当時の大村哲郎地区ガバナーから堀口会長に手渡された。翌7月からは、いよいよ新体制での活動がスタート。吉田寛幹事によると、会員からは早くも「例会が楽しくなった」「活気が出た」などの声が聞かれるという。

　その辺りを堀口会長は、

「神戸すずらんライオンズクラブも、私が入会した頃は活気があったんですよ。理事会なんか、けんか腰でしたからね。それが会員が少ないと、なれ合いというか、議論をすることもなくなり、それがまたマンネリにつながるという悪循環でした。会員数が多ければいいという訳ではありませんが、合併効果は目に見える形で、確実に現れています」

　と話す。

　そんな中、其浦元地区ガバナーは、

「合併を成し遂げたと言っても、我々はスタート地点に立ったに過ぎません。合併が成功かどうかは、今後の活動にかかっているのです」

　と、冷静に話す。

「当初目指していた新設合併が出来なかったのも残念でした。なぜ新設にこだわったかと言うと、吸収合併では存続クラブが主導権を握ってしまい、解散クラブの皆さんのせっかくの能力が抑え込まれ、思うような活動が出来ないのではと危惧したからです。国際協会には新設合併の概念がなく、断念しましたが、先々を考えると、新設合併の必要性は高いと思います。会員数の少ないクラブ同士が小異を捨て大同団結することで、楽しく、夢のある目標を持ち、明るく活力あるクラブ作りから再出発出来るわけです。ぜひ、今後は議論を深め、国際協会での合併規定を改正してもらいたいと考えています。

　今回、神戸みなとライオンズクラブは通常の合併という形式で再生したわけですが、気持ちの上では『新設合併』のつもりです。完成した絵に描き足していくのではなく、新しい絵を描き始めなければなりません。それが出来て初めて、この合併が成功したと言えるのだと思います」

最近の合併クラブ・データ

年月	クラブ
2008年7月	福岡県・北九州40（北九州26／北九州小倉南13）
2008年7月	東京尾張町36（東京尾張町31／東京スカイ5）
2008年7月	長崎東72（長崎東63／長崎第一8）
2008年9月	大阪東住吉平野35（大阪東住吉17／大阪平野18）
2008年10月	熊本県・長洲有明22（長洲18／有明4）
2008年12月	宮崎第一25（宮崎第一23／宮崎マリーン2）
2009年1月	兵庫県・神戸六甲ポート30（神戸六甲24／神戸ポート6）
2009年1月	大阪東49（大阪東37／大阪北浜船場12）
2009年5月	熊本マグナ51（熊本マグナ40／熊本みどり11）
2009年5月	熊本県・水前寺・銀杏30（熊本銀杏12／水前寺18）
2009年6月	兵庫県・神戸みなと46（神戸湊川25／神戸すずらん7／神戸北野11）
2009年6月	山口県・岩国桜43（岩国桜38／美和6）
2009年6月	大阪大和川28（大阪あびこ15／大阪住吉中央13）
2009年6月	大館北20（大館北16／大館花矢4）
2009年7月	大阪城南東部29（大阪城南20／大阪東部10）
2009年7月	熊本キャッスル41（熊本キャッスル32／熊本白川9）
2009年7月	岡山県・高梁32（高梁26／成羽5）

※左から合併年月、合併後のクラブ名と会員数（合併前のクラブ名と会員数）

NEWS CASSETTE

女性の手でライオンズの活性化を

8月20日、千葉県浦安市のヒルトン東京ベイで333・C地区（千葉県／高田浩ガバナー）女性フォーラムが開催された。「これからの活性化は私達女性の手で」のテーマだが、参加者約200人のうち半数近くは男性。主催の地区女性会員増強委員会（長澤千鶴子委員長）は「ぜひ男性にも聞いてもらいたい」と、男女を問わず参加を呼び掛けた。

開会にあたり、今年度はGMT会則地域リーダーを務める後藤隆一元国際理事があいさつし、フィリピンではガバナーの半数は女性で、アジアの他の国々でも女性リーダーの活躍が目覚ましいことを紹介。ライオンズの活性化には女性と若い世代の活躍が不可欠だと話した。フォーラムでは櫻井慧子元330・C地区ガバナー（埼玉県・大宮グリーンライオンズクラブ）、河合悦子330・A地区第1副地区ガバナー（東京みやこライオンズクラブ）、高橋かずこゾーン・チエアパーソン（大阪府・堺フェニックスライオンズクラブ）、熊本了子クラブ幹事（広島もみじライオンズクラブ）が、女性リーダーとしての経験を踏まえて、会員増強や女性リーダーの輩出、アクティビティなど、それぞれのテーマで講演。その後、4人をパネリストにパネル・ディスカッションが行われた。

半年前から準備を進めてきたというこのフォーラム。長澤委員長は「女性が積極的に盛り上げていかなければ、これからのライオンズの活性化は難しい。年度初めの開催で、早くから会員増強への意識を高めたいと考えました。参加した皆さんにはクラブに戻って早速取り組んでほしい」と語っている。

2010~12年国際理事候補者

8月3日、東京・東銀座の日本ライオンズ連絡事務所で第1回国際理事候補者選挙管理委員会(小池聴明委員長/332複合)が開催された。7月31日の締め切りまでに同委員会に提出された推薦要望書は1通のみで、同委員会は国際理事立候補者推薦手続規則に則って、八複合地区の推す2010~12年国際理事候補者として山浦晟暉元協議会議長(東京新宿ライオンズクラブ)を推薦することを決定した。

パタヤ・フォーラムで日本語によるセミナー開催

11月19日~22日、タイ・パタヤで開催されるOSEALフォーラムで、日本の参加者向けのセミナーが開かれることが決まった。日程は21日13時から、テーマはLCIF。講師を務めるのは視力ファーストの技術顧問で、長年にわたり東南アジア地域の失明予防活動に尽力されている紺山和一博士。ラオスで実施された視力ファースト事業の話題を中心に、インドシナにおける眼科医療の現状と今後の方向性について語る。ラオスではこれまでに3千件を超える白内障手術や、首都ビエンチャン中心部のサテライト・クリニック(写真)の開設、チャンパサにおける眼科病院建設の事業が実施されている。ラオスでプロジェクトの実務を担当する医師も出席予定。日本のライオンズが大きく貢献しているCSFⅡ、LCIFの資金がどのように生かされているか、現場を熟知する紺山博士から直接話を聞く、またとないチャンスになる。

レオ、ライオネスのクラブ数、会員数

2009年6月末の国内のレオクラブ数は145クラブ、会員数3492人、ライオネスクラブ数は96クラブ、会員数2260人だった(日本ライオンズ連絡事務所調べ)。昨年度中に4レオクラブ、9ライオネスクラブが解散し、新結成クラブはなかった。複合地区別に見ると、レオクラブは337複合地区が60クラブと最も多く全体の4割を占め、ライオネスクラブは334複合地区が26クラブと最も多い。

国際本部・太平洋アジア課発――

オークブルック通信

今月号からスタートする本欄では太平洋アジア課から情報を得て、国際本部の業務や、日本のクラブ、会員向けの情報をお伝えしていく。今回はまず、国際本部の構成について。

国際本部と太平洋アジア課

国際本部には11の部、その下に44の課があり、スタッフ約250人が勤務している。これら11の部は、独立する法律部、大会部、LCIFを除いて、その役割から大きく三つに分けられる。①人事、財務他協会の財産を管理するグループ(財務、IT)、②ライオンズのリーダーとメンバーを支援するグループ(クラブ用品、地区及びクラブ行政、リーダーシップ)、③プログラムの実施やマーケティングを行うグループ(国際アクティビティ及びプログラム企画、エクステンション・メンバーシップ、PR)。

全本部スタッフのうち、日本語を使って日本のライオンズを支援する職員は8人。そのうち2人はLCIFに所属し、残りの6人が太平洋アジア課に所属している。

太平洋アジア課が属する地区及びクラブ行政部の任務は、大きく分けて二つある。一つ目は、国際理事会・地区及びクラブ・サービス委員会の意思を反映しながら、地区やクラブの運営を支援するための事務手続きを遂行すること。二つ目は国際本部の12の公式言語でのサービスを提供すること。これらを適切に行うために、部は使用する言語によって担当地域を四つの課で分担している。太平洋アジア課では、日本語を母国語とする職員が6人、中国語と韓国語を母国語とする職員それぞれ2人ずつが業務に当たっている。

次回は同課の業務内容について紹介する。

LIONS ON LOCATION 世界で奉仕するライオンズ（『ライオン』誌本部版より）

バングラデシュ

サイクロン被害者を助けた箱

今年5月25日、バングラデシュ南西部の海沿い地域を襲ったサイクロン、アイラは痛ましい被害をもたらした。70万軒以上の家屋と、16万ヘクタールもの農地が深刻な被害を受け、死亡者と行方不明者の数は2千人を超えた。

315B-4地区のライオンズは1カ月にわたり、被災した家族が困難な状況を乗り切るために必要な物資を箱に詰めて送った。数千の家族の元へ届けられた箱には、米、レンズマメ、大豆油、塩、マッチ、男性用と女性用、子ども用の衣服、蚊帳、石けんが入っていた。国内の他の3地区も救援物資を供給した他、LCIFからは1万ドルの緊急援助金3件が交付された。サイクロンは住む家を奪い、多くの命を奪った。しかしライオンズを始めとする多くの人たちが、被災者の生活を再建するために援助の手を差し伸べている。

ドイツ

自転車と太陽

ドイツのノインキルヒェン ライオンズクラブが主催する自転車ツアーの成功を阻むものがあるとすれば、それは悪天候。しかしライオンたちはそれほど心配していない。事業の後援者であるカースティン・シュリーフ神父が「神様に頼んでくれたから」とメンバーは言う。

そして迎えた当日。快晴の空の下、出発地点に並んだ参加者200人は、地元のブラスバンドのはつらつとした演奏に見送られてスタートを切った。演奏のお礼として、バンドにはクラブからトランペット1台を寄贈した。

この自転車ツアーによってクラブが獲得した3千ユーロの資金は、キャンプやいじめ防止、薬物乱用防止プログラムなどの青少年支援事業に役立てられる。

ニュージーランド

慰霊と平和の光

羊たちが草を食む牧場と農場に囲まれたニュージーランドのテムカは、人口4千人の小さな町。第1次世界大戦中、こののどかな町から大勢の人々が兵士として戦地に向かった。今、テムカの戦争記念碑には114人の名前が刻まれている。悲しいことに戦争は繰り返され、そのうち43人は第2次世界大戦の戦没者だ。

昨年、テムカ ライオンズクラブはこの記念碑を照らす照明設備を取りつけることを決めた。設置に必要な7,400ドルの資金は、クラブ基金の一部とガレージ・セールなどの収益で賄った。

4月25日は戦争で亡くなったオーストラリアとニュージーランドの人々を追悼する記念日となっている。その夜、テムカの人々は照明の光を浴びた記念碑の下に集った。その明るい光は名誉ある死者たちの名前だけでなく、平和を願う人々の心も照らしていた。

333・A地区ガバナー紹介

7月に逝去された333・A地区（新潟県）樋口剛正ガバナーの後任の地区ガバナーが決定した。略歴、就任に当たっての抱負は左記の通り。

関口　一栄

せきぐち　かずえい：新潟南ライオンズクラブ。76年入会。91年度クラブ会長。94年度地区会計。98年度ZC。07年度RC。㈱ふじ・クリエイティブ・センター代表取締役。69歳。

人間の身体に例えますと、心は国際会長のテーマ「MOVE TO GROW」、内局全員が頭脳であり、11の委員会は五臓六腑に相当。リジョン、ゾーン・チェアパーソンは手となり足となって各クラブへも指導力発揮が重要。ではガバナーは？ 顔か。いや顔じゃない。背中です。美しい背中づくりが役目。顔は会員一人ひとり。キャビネットが機能しなければゆがんだ顔になる。市民に良い印象を与える笑顔づくりがキャビネットとしての第一歩です。

日本アイバンク協会が献眼推進フォーラム開催

㈶日本アイバンク協会が主催、全国54のアイバンクが共催する「愛の献眼50周年　献眼推進フォーラム」が10月31日に東京で開催される。同協会は2007年に日本で最初の角膜移植手術から50年目を迎えたのを契機に、3年間にわたる「愛の献眼50周年献眼推進特別活動」を展開してきた。フォーラムはその最終年を記念して開かれる。プログラムにはアイバンク活動の経過と現状報告の他、作家の曽野綾子氏による講演、記念コンサートが組まれている。

フォーラムの日程、会場は左記の通り。

日時：2009年10月31日（土）13時20分～16時

場所：東京都目黒区／こまばエミナース・ダイヤモンドホール

参加申し込みは、10月10日まで同協会ウェブサイト（www.j-eyebank.or.jp/）で受け付けている。フォーラムに関する問い合わせは日本アイバンク協会事務局（TEL03・3293・6616）へご連絡を。

国際大会で中古眼鏡6万個以上がリサイクル

7月のミネアポリス国際大会で行われた中古眼鏡収集で、6万1463個の眼鏡が集まった。これらの中古眼鏡は、大会ホストを務めた5M複合地区（アメリカ・ミネソタ州）が大規模なキャンペーンを展開して収集した合計22万5千個の一部として、ウィスコンシン・リサイクル・センターへ送られた。センターで検査、処理が行われた後、開発途上国への視力ミッションを実施するライオンズやその他のボランティア・グループに配布される。

会議録

第1回ライオン誌日本語版委員会（7月30日／ライオン誌日本語版事務所／出席者：杉本忠夫国際理事、後藤隆一、栢森新治両元国際理事、後藤忍議長、渡邊豊隆、坂井正、小俵義正、山根健08年度委員、秋山詔樹、瀧澤嘉門、林静誠、砂田繁雄、大島康男、小田邦雄、塩倉安伸09年度委員、荘英隆、小柴登司、辰巳博昭各ITアドバイザー）

①08年度ライオン誌日本語版委員会「年次報告」②08年度ライオン誌日本語版事務所「決算報告」③08年度ライオン誌日本語版事務所「監査実施報告」④09年度ライオン誌日本語版委員会委員長、編集長互選⑤「ライオン誌日本語版委員会方針」の確認⑥09年度ライオン誌日本語版事務所予算（案）⑦8月号（10万8200部発行）出来⑧9月号記事内容の確認⑨10月号以降台割（案）と主要記事予定⑩オンライン報告システムServamA⑪その他

第1回国際理事候補者選挙管理委員会（8月3日／日本ライオンズ連絡事務所／出席者：菅原雅雄、宮脇寛海、小池聡明、林護、大石巌、村上昭治、増田十郎各委員長、後藤忍、石井征二両議長）

①委員長の互選②国際理事立候補者推薦手続規則の確認③2010～12年度国際理事選出の確認④推薦要望を提出した国際理事候補者⑤推薦要望書の内容確認と審議⑥決定に伴う事務処理

緊急複合地区国際大会委員長連絡会議（8月10日／日本ライオンズ連絡事務所／出席者：桜井孝一、古谷野環、佐々木貞夫、眞尾博、滝澤巌、岡田宏、榎本巳之助各委員長、後藤忍、石井征二両議長）

①緊急会議開催の経緯②世話人、副世話人の互選③第48回東洋・東南アジア・フォーラム④第93回国際大会情報

第1回日本ライオンズ連絡事務所管理委員会（8月24日／日本ライオンズ連絡事務所／出席者：齊藤實、矢口武克、大熊泰雄、千葉正勝、鈴木正二、小林登、住本親人各委員）

①委員長、副委員長の互選②連絡事務所管理委員会関連各規定③前年度議長連絡会議からの申し送り事項の確認④2009・10年度暫定収支予算（案）⑤連絡事務所顧問

第2回複合地区ガバナー協議会議長連絡会議（8月25日／日本ライオンズ連絡事務所／出席者：石井征二、後藤忍、三浦利治、加藤弘明、太田道信、大村哲郎、山地章靖、北島建則各委員、杉本忠夫、不老安正国際理事）

第1部：①エバハルト・J・ヴィルフス国際会長公式訪問日程（案）②アルバート・F・ブランデルLCIF理事長セミナー（案）③上位ライオンズ・リーダーシップ研究会④第48回OSEALフォーラム⑤韓国ライオンズからの提案⑥「国際青少年音楽コンクール」　第2部：⑦eMMRシステム導入について（ライオン誌）⑨各委員会・連絡会議報告

新結成／解散／合併クラブ

■**新結成クラブ**

長崎県・はさみ炎（楠本真会長）▼7月26日結成▼スポンサー／波佐見

■**解散クラブ**

神奈川県・横浜西ふじ／山梨県・須玉明野／北海道・小清水／岩手県・雫石／秋田県・大館花矢（合併）／大阪長堀橋／大阪住吉中央（合併）／大阪東部（合併）／大阪府・京阪さつき／大阪府・大東畷さらら／京都西山／島根県・吉田鉄の歴史村／山口県・美和（合併）／福岡県・北九州ルネッサンス／長崎県・五島中央

■**合併クラブ（合併前のクラブ名）**

秋田県・大館北（大館北／大館花矢）

大阪大和川（大阪あびこ／大阪住吉中央）

大阪城南東部（大阪城南／大阪東部）

山口県・岩国桜（岩国桜／美和）

訃報

■**元国際役員**

ライオン岡本房一（福岡県・北九州高塔）

8月6日死去、87歳。94年度337・A地区ガバナー。

■**献眼者**

7月＝ライオン小林勉（茨城県・岩井）／ライオン市川文子（愛知グレース）

国際大会開催予定

2010年：オーストラリア・シドニー／6月28日～7月2日

11年：アメリカ・ワシントン州シアトル／7月4日～8日

12年：韓国・釜山／6月22日～26日

13年：ドイツ・ハンブルグ／7月5日～9日

GMT 通信

334～337複合地区（西日本）担当
GMTリーダー
高田順一

2008年度から3年間にわたり継続的に会員増強に取り組む「グローバル会員増強チーム（GMT）」。複合地区、地区とのチームワークで、会員増強の目標達成をサポートするGMTリーダー2人に、交替でチームの動向や担当エリアの会員増強の成功事例などを伝えてもらう。

ミネアポリス国際大会に先立ち、7月3日から6日の日程で地区ガバナー・エレクト（DGE）セミナーが開催されました。私は今回のセミナーで日本のグループ・リーダーを務めました。333・A地区の樋口剛正ガバナー・エレクトは病気療養のため欠席されましたので、34人のDGEの皆さんとじっくりと向かい合う機会を頂きました。帰国後、ラオン樋口がお亡くなりになられたことを知りました。心からご冥福をお祈り申し上げます。

私は03年度の地区ガバナーを務めましたので、6年前にコロラド州デンバーでDGEセミナーに参加致しました。毎日ぎっしりとカリキュラムが用意され、久しぶりにしっかり勉強したという印象が残っています。そのセミナーのグループ・リーダーを仰せつかったのですから緊張感を持って準備を始めました。届いたグループ・リーダー用の分厚い教科書を見ると、これが英語版でした。それからは毎日、辞書をめくりながら翻訳に取り組みました。私も苦労しましたが、DGEにも難しい事前課題が与えられていました。

それは地区ガバナーとしての会員増強目標、行動計画の作成でした。四半期ごとに新クラブ結成、新会員、チャーター・メンバー、退会者、会員純増を具体的に数字で表し、それを集計して年間計画とします。その目標を達成するための行動計画では新クラブ結成、会員増強、会員維持の各項目に対し、措置の各段階を講じる方法、完了させる日時、実行責任者、措置の各段階が完了したことの確認方法を記述します。

世界753人のDGEにはこれを作成しグループ・リーダーに報告した上でセミナーに参加することが義務付けられていました。日本のDGEの皆さんは時間こそ掛かりましたが、全員が事前課題を提出されました。他国では提出率が半分程度のグループもあり、私は日本のDGEの意識の高さを誇りに思いました。

セミナーでは各自の会員増強計画を題材にしたグループ・ディスカッションを経て最終の計画を作成しました。各地区ではこの計画に基づき既に実行段階に入っています。さまざまな困難があると思いますが、地区のチームワークを発揮され、その困難を乗り越え目標を達成して頂きたいと思います。

目標達成のアプローチの一例として、DGEの皆さんには退会防止のワークショップを体験して頂きました（写真）。皆さんがスムーズにブレーン・ストーミングを行われ、行動計画を作成されました。各地区でワークショップが開催され、会員維持に貢献出来ることを期待しております。なお、ワークショップ教材はライオン誌ウェブマガジン（www.thelion-mag.jp）でダウンロードしてご利用頂けます。

Lions Clubs International Foundation

LCIFファイル

協力団体との連携で、より効果的な予防プログラムを

ライオンズクラブ国際財団（ＬＣＩＦ）の効果的な青少年育成プログラム「ライオンズクエスト」は、アメリカ地域社会薬物乱用防止連合（ＣＡＤＣＡ）と連携し、薬物のない、安心かつ健全な町づくりを目指している。

長年、ＣＡＤＣＡに対し支援提供を行ってきたＬＣＩＦは、２００７年に更に連携を強め、アメリカ全土で大きな成果を収める活動を行った。ＣＡＤＣＡを通じて、アメリカ各地のライオンズが地域団体と協力し、この青少年育成プログラムを実施したのである。

協力機関は地元の学校、企業、医療福祉団体から政府機関にまで及び、共に薬物乱用を防ぐための地域社会の取り組みに従事した。

「我々は、若い人たちが安全に健やかに有意義な人生を送れるような環境づくりに取り組んでいます」

と話すのはＣＡＤＣＡのラリー・ディルワース副代表。

ＬＣＩＦとＣＡＤＣＡが共に目指すゴールは、「青少年に薬物使用を避けるためのスキルを提供し、健やかで実り多い人生を送ってもらう」こと。また、お互いの協力関係を更に強固なものにするために、薬物乱用防止に関する指導方針について三つの指標も設けている。

1. 両団体の使命・活動内容について、集会の場で、あるいはさまざまな情報手段を使って、認知・教育を行う
2. ライオンズクラブのメンバーと地域団体との間に有意義な協力関係を築く
3. 地元団体から国際的機関まで、薬物乱用防止を目指す協力団体の支援を探る

ディルワース副代表はこうも話す。

「ライフスキルを身に付け、奉仕活動を学ぶことは、予防プログラムの中でも最も重要な要素です。青少年は自ら意思決定する術を学ぶことで、薬物使用などの違法行為に直面した時、正しい決断を導くことが出来るのです」

１９８４年、ライオンズクエスト・プログラムの権利を獲得して以来、ライオンズは地域社会と共に青少年育成プログラムを遂行してきた。そしてこのプログラムは、世界各国の教育現場で実践され、健やかな青少年の育成に役立てられている。

ＣＡＤＣＡは地域社会と一体となり、薬物のない、安心で健全な町づくりを使命としている全国規模の非営利団体で、全米に5千以上もの地域連合を持つ。また、アメリカ合衆国国務省に協力し、南米の地域団体に対して、反ドラッグ連合設立のための指導を行っている。

ＬＣＩＦとＣＡＤＣＡのような協力関係は、安全な地域社会を目指し、青少年の薬物乱用を防ぐ教育を遂行する上でなくてはならない存在である。既に確立されている両団体によるパートナーシップによって、より多くの住民に対し、より多くの成果をもたらすことが出来る。

詳細についてはＣＡＤＣＡのホームページ（www.cadca.com）を参照頂きたい。

SightFirst Update

アジアの子どもたちを失明から救う

ジーナ・プレンキ

マレーシアに住むアニス・ジャマラディンの9歳の娘は、バドミントンで遊んでいる最中に目を傷つけてしまった。アニスが娘を病院に連れて行き、医者の診断を仰いだ結果、娘の目は外傷性白内障であることが判明した。

翌日、少女は東マレーシアのコタキナバルにある新しいライオンズ・世界保健機関（WHO）児童アイケア・センターで視力を保護する手術を受けた。

「娘の視力を取り戻してくれた医師やライオンズに感謝しています」

ジャマラディンは話した。

「このセンターは専門的な治療を提供してくれます。私たちの地元にこのような施設があって幸いです」

児童アイケア・センターは視力ファースト・プログラムによって建設された。同じような小児眼科医療施設はカンボジア、インドネシア、ミャンマー、フィリピン、ベトナムにもあり、アジアではこれまでに6施設が設立され、世界全体では30カ所に達している。

視力ファースト・プログラムは児童期失明の予防に対して過去5年間に400万ドル以上の資金を提供しており、これらの施設は400万人以上の眼科検診を行い、4万5千件の小児白内障手術を実施、20万人以上に屈折障害の治療を施した。また2万500人が主要なアイケア・トレーニングを受け、そして更に眼科専門家千人がアイケアの高等教育を受けた。

その一つ、マニラにあるフィリピン総合病院の医療施設では、小児失明の治療を週2回行っているが、常に順番待ちの患者が診察室の外まで並んでいる。マニラから50マイル以上離れたアンヘレス市のライオンズは、子どもたちをこのセンターまで車で連れて行く。3月に4人の子どもたちを連れて行ったところ、彼らは角膜や網膜に問題があったり、弱視など、さまざまな目の障害を持っていることが分かった。クラスメートに殴られた一人の少年は、義眼を作ることになった。

視力ファーストのおかげで、フィリピン総合病院にあるライオンズ・WHO児童アイケア・センターは最新機器が完備され、先端の小児眼科医療施設として機能出来るようになった。また小児眼科医を訓練して、サービスが十分でない地方の町で、必要な仕事が出来るようにするため、1年間の奨学金制度も設けた。近い将来、このセンターは小児眼科プログラムがない近隣の国々にも奨学金を提供する予定だ。

マニラにあるライオンズ-WHO児童アイケア・センターで、幼い子どもの治療を行うフィリピン総合病院の小児眼科医

CLUB REPORT クラブ・リポート

●当欄はライオンズ、レオ、ライオネスの活動報告を扱います。投稿要領は56ページ参照

長崎県・大村ライオンズクラ

フィリピン貧困地区での青少年健全育成事業

大村ライオンズクラ（小尾重厚会長／65人）は昨年度、「感謝・感動・心の絆を大切に」というスローガンの下、ウィ・サーブの精神で奉仕活動にまい進。クラブ結成45周年記念として国際チャリティー事業を実施した。テーマは「イポナン地区に夢と希望と元気な笑顔を‼」である。

フィリピン・ミンダナオ島の北部に位置するカガヤンデオロ市。同市イポナン地区内に暮らす人々は貧しく苦しい生活を余儀なくされている。そこで当クラブでは6月4～8日に現地を訪問。教育物資が不足している小学校2校と、経済的理由からなかなか学校へ通えない子どもたち約2千人一人ひとりに、学用品や生活用品を手渡した。

また、この厳しい環境にある子どもたちの心と体の健やかな成長を願い、イポナン地区に夜間照明付きの屋外バスケットボール・コートを建設、寄贈した。このコートは地区の集会所や、水害時における避難場所としても活用されることになる。

これらの事業資金150万円は、周年記念事業費の積み立て金50万円の他、08年8月のおおむら夏越まつりに出店しての収益金30万円と、今年3月に開催した国際チャリティー・ゴルフコンペでの70万円を充当したものである。

今回、コンスタンティーノ・ジ・ハロウラ・カガヤンデオロ市長やバランガイ・イポナン地区議長、そしてゴールデンフレンドシップ ライオンズクラとの縁で実現した同事業を通し、国と言葉を超え同じ人間として喜びと感動を分かち合い、心の絆を育んだ。そして厳しい現実を自身の目で見て耳で聞いて知り、五感で体感することが出来た。しかし地球上にはもっと厳しい環境・情勢の国や地域があるだろう。今回の貴重な経験をぜひ今後のライオンズ活動の糧として、生き生きと躍動していきたい。

（幹事／酒井辰郎）

兵庫県・明石魚住ライオンズクラブ

ライオンズクエストで初のモデル校区導入を目指す

8月5日、6日の両日、明石市立錦浦小学校の教職員を対象に、ライオンズクエスト・プログラムの校内型ワークショップが開催された。明石魚住ライオンズクラブ（永谷仁会長／10人）の担当で、校長、教頭を始め32人の教職員が参加。同小は若い教師が多く、体験型、参加型のワークショップにもあまり抵抗感なく取り組めているようで、新学期からのプログラム導入に向けて期待が高まる2日間となった。

実は明石魚住ライオンズクラブでは既に昨年11月、同じ校区の魚住中学校でも校内型ワークショップを開催。その打ち合わせの過程で、小学校でもプログラムを実施してくれれば更に効果が高まるだろう、と校長から話があった。

そこで同クラブでは、次なる目標を魚住中学校区でのライオンズクエスト小中一貫教育と定めて活動を開始。魚住中学校の協力もあり、この夏休み期間中に今回の錦浦小学校と、もう1校の清水小学校でのワークショップ開催までこぎ着けた。これが実現すれば、初のモデル校区誕生として、大きな注目を集めるところだった。が、好事魔多し。

「実は清水小学校は8月25、26日で校内型ワークショップを開催することになっていたんです。しかし、1学期に新型インフルエンザにより休校になった授業時間を埋めるため、夏休みが短縮され、あろうことか2学期の始業式が25日になってしまいました。本来なら、新学期から錦浦小、清水小の両校でプログラムが導入され、来春、魚住中に入る子どもたちは全員、ライオンズクエストを経験していることになるはずだったんですが……。新型インフルエンザがこんな形で影響してくるとは考えてもいませんでした」

と、今回の校区全体でのプログラム導入を進めてきた同クラブの橋本維久夫はくやしそうに話す。

が、校区での小中一貫導入は既定の事実。同クラブは既に清水小での校内型ワークショップ開催の日程調整に入っている。

（取材／鈴木秀晃）

青森県・中泊ライオンズクラブ

1万匹が乱舞するホタルまつり

中泊ライオンズクラブ(29人)は2005年に中泊町ホタルの会が発足して以来、クラブ・メンバー全員がその会員となり、毎年7月中旬に中泊町滝の沢ふるさと砂防愛ランドで開催される「ホタルまつりinなかどまり」を応援している。会場は1万匹ものホタルが飛び交う幻想的な空間となる。

主な活動は現地会場での案内・交通整理である。祭りの開催中は一般車両乗り入れ禁止になるため、津軽鉄道が津軽五所川原駅から津軽中里駅までのホタル列車を運行。津軽中里駅から会場まではシャトルバスが観客を運ぶのである。また、今年は祭りそのものを一層盛り上げたいという観点から出店を計画。ライオン・レディーの協力も得て、町内外から訪れるお客様に心づくしのサービスを提供、ライオンズクラブの存在もアピールした。

これらの働きはホタル祭りの実行委員会からも高い評価を受け、感謝・ねぎらいの言葉と共に、以降もぜひ共に祭りを盛り上げてほしいと言って頂いた。更にお客様からも「さすがはライオンズ」とお褒め頂き、心からやって良かったという充実感を感じたのである。

観光資源の乏しい町にとって、毎年千人以上を動員するホタル祭りは重要なイベントであり、ライオンズとしても地域社会に大きく貢献出来る機会である。クラブ内でも「協力を惜しまない」、「ヤレヤレ！」といった積極的な意見が多い。日本各地のライオンの皆さんもぜひ一度、当地自慢のホタルを見に来て頂きたい。メンバー一同、心からお待ち申し上げております。

（会長／田中博）

京都府・舞鶴みなとライオンズクラブ

舞鶴こども発明クラブ、スタート

今年も舞鶴みなとライオンズクラブ(片又昇会長／23人)主催の「舞鶴子ども発明クラブ」が7月26日からスタートした。1994年に小学校のゆとり教育で土曜日が休みとなったのを機に、舞鶴市と共催でウィークエンドサークルとして立ち上げ、昨年から当クラブ単独主催となったもの。子どもたちに科学やものづくりの楽しさを知ってもらうことを目的に、7月～翌年2月の毎月1回と、閉講後に作品展を開催する。10月頃には教室を飛び出して体験旅行、私の仕事館や神戸青少年科学館の見学、米村伝次郎さんを招いての特別講座なども実施している。

今回子どもたちは、封筒の重さを量る「レタースケール」作りに挑戦。万力や糸のこぎりを使う作業に真剣かつ楽しそうに取り組んでいた。これまでには藍染め、タッチセンサーロボットの制作他、さまざまな作品を手掛けてきた。技術指導に舞鶴高専電気情報工学科教授やポリテクカレッジ電子技術の先生ら5人の協力も頂いている。

イラスト／篠田和夫

近年は子どもたちも習い事やスポーツクラブなどで忙しいのか、当初は50人程集まった参加者が今年は15人。が、一人ひとりに目が届くという良い点もある。クラブでは子どもたちに夢を与えるこの事業に重点を置いて取り組んでいくつもりだ。

（こども発明クラブ委員長／藤村良幸）

広島フェニックス ライオンズクラブ

大学生薬物乱用防止教育認定講師育成

広島フェニックス ライオンズクラブ(清水徹会長/45人)は、広島国際学院大学及び㈶麻薬・覚せい剤乱用防止センターと連携して、全国初の大学生薬物乱用防止教育認定講師育成に取り組んでいる。

これまでにも高校生以下の生徒・児童に対しては薬物乱用防止教室を積極的に開催してきた。が、大学生を対象とした新しい薬物乱用防止の取り組みでは、薬物についての正しい知識を身につけてもらうだけでなく、学生認定講師を育成して、地元の小中学校、高校での講座に派遣、自身の自覚と教養を高めると共に、地域社会に奉仕する誇りを養い人間形成に役立ててもらおうと考えた。

7月10日、関係組織が集まり第1回の計画会議を開催、事業の目標や方針などを話し合った。学校は主に参加学生の募集や学内での活動環境作りの整備、センターは啓発資材やキャラバンカーの提供、クラブは資金面及び認定講師講習会の開催、学校での防止教室を主催し学生講師を派遣する等の役割を担う。同取り組みについては周囲の関心も高く、NHK広島を始め地元テレビ3局により、会議の様子がニュース放映された。

今後の予定としては、11月に講習会を開催し学生講師を認定、年内はライオンズが行う講習会に補助として、来年1月から認定講師として活躍してもらう。既に小学校5校での開催が決まっている。

こうした学生主体の活動は、大学内でのサークル組織の設立や他大学との交流によって、薬物乱用防止の啓発になる。更に、学生認定講師が教職に就いた場合は授業の中で講義を行うことも可能だろう。そしてこの取り組みがライオンズによって全国的に広がっていくことを期待している。

最近、大学生による大麻の栽培や薬物使用などが報道されるが、それはごく一部であり、大半はまじめに生活している学生だと思う。彼らに薬物乱用防止における責任ある役割を提供し、創意工夫を凝らして活動してもらうことは、きっと彼ら自身にとっても大きな人生財産になる。ひいてはそうした若者が住みよい日本を作っていってくれると信じている。(青少年・レオ・薬物乱用防止委員長/横路望)

和歌山伏虎ライオンズクラブ

海の安全呼び掛ける徳川吉宗公

我が紀州藩の第5代藩主であり地元が誇る偉人、徳川第8代将軍徳川吉宗。目安箱を江戸市中に設置するなどの享保の改革を実行した人物である。

和歌山伏虎ライオンズクラブ(26人)は1994年、結成30周年記念事業として、県庁のある大通りの交差点にこの吉宗公の銅像を設置した。地元のヒーローへの尊敬と親しみを感じてもえたらと思った。

すると今年、和歌山海上保安部から思いがけない申し出があった。この吉宗公にライフジャケットを着せ、海でのジャケット着用の徹底を呼び掛ける啓発活動を行いたいというのである。佐々木渉警備救難課長によると、ライフジャケットを着用した場合、付けていないケースより約2~3倍救命の確率が上がるのだそうだ。もちろんクラブとしては快諾。保安部職員が特製ジャケットを吉宗公に着せると、道行く人々は立ち止まるなどして興味深げにこれを見ていた。交通量も人通りも多い場所にあるので大変有効だと思う。

海上保安部ではこの啓発活動を今後行うかどうかを決定していないそうだが、せっかくなので、我々は来年以降も継続して頂きたいこと、協力を惜しまないことを申し入れているところである。

(会長/岡本有喜)

沖縄県・那覇守礼ライオンズクラブ

「掛屋剛志君コンサート」開催

那覇守礼ライオンズクラブ(23人)は7月19日、結成30周年記念事業として「掛屋剛志君コンサート」を開催した。剛志君のコンサートはこれまでに、長崎県・佐世保ライオンズクラブを始め多くのライオンズや学校等により全国20カ所で開催されている。

剛志君は視力障害、免疫不全、成長ホルモン分泌不全、喘息、突発性低血糖症、脂肪吸収障害など、複数の障害を抱えて生まれた。しかし、長年にわたる努力とご両親の深い愛情を受け、幾度となく生命の危機を乗り越えて、聴衆を魅了する類い稀な音楽の才能を開花させたのである。

今回のコンサートは、厳しい状況にも負けずに、生きる希望の光を見いだし幸せをつかんだ剛志君とご家族に接することで、身体障害者の方々を始め多くの聴衆の皆様に生きる勇気を感じて頂きたいと企画したものである。

また、沖縄滞在中に剛志君にもすばらしい経験をと思い、かねてからお父様がセッションを希望されていたアフリカ・ギニアの打楽器奏者YOOLさんが沖縄で活動されていたので、コンサート前日に1時間レッスンをして頂くことにした。するとYOOLさんは「こんなすばらしいメトロノーム(拍、音感)を持った人を見たことがない」と剛志君を絶賛。剛志君もお父様も大喜びだった。

コンサートへは盲学校、特別支援学校の生徒さんやOB他、520人を招待。コンサートの最後には、福祉作業所12団体に支援金60万円を贈呈した。

今回のコンサートは、剛志君もお父様も大変満足され、聴衆の皆様も剛志君の澄んだ歌声によるピアノの弾き語りに感動の涙を浮かべ、主催した当クラブの会員も充実感に浸り、皆がハッピーな一日となった。(会長/野中哲)

北海道・門別ライオンズクラブ

競馬を応援する会設立

門別ライオンズクラブ(32人)はこの度、「ホッカイドウ競馬を応援する会」を旗揚げした。

北海道は日本一の馬産地だが、レジャーの多様化などから地方競馬事業の経営は悪化。かつては道内5カ所を巡回して開催されていたものが、09年には札幌と門別の2カ所になってしまった。競馬の先行きには町内はもとより管内の軽競馬生産者の命運が掛かっていることから、我々民間でも出来ることから始めようと呼び掛けたのである。種馬生産振興会や商店街振興会、各種事業組合、商工会、自治会などがこれに呼応して応援する会が誕生、私が初代会長を務め、日高町商工会に事務局が置かれることになった。

我々はまず、門別競馬場を訪れる競馬ファンを歓迎するためにのぼりを作成。日高自動車道富川インターから競馬場へ向かう国道沿いに設置した。のぼりには「歓迎　ようこそホッカイドウ競馬へ」の他、交通安全の文字が表示されている。近いうちに競馬場へ向かう交差点に歓迎案内看板も設置する予定である。

地場産業活性化につながるこうした活動が、願わくば日高だけに止まらず、道内に広がってほしい。(会長/秋田勝之)

広島県・尾道瑠璃ライオンズクラブ

カナダの和太鼓団体が来尾

尾道瑠璃ライオンズクラブ（62人）は7月17日、カナダ・バンクーバーの和太鼓団体「ちび太鼓」を尾道市に招請した。団員は6～23歳の日系カナダ人13人。10日間の滞在中にさまざまな日本文化を体験してもらった。

尾道は映画の街である。私は映画関連の各種コーディネートをしていることから、日系カナダ人の映画監督リンダ・オオハマ氏と10年来の親交があった。彼女の娘さんがちび太鼓に所属しており、団員たちがぜひ和太鼓の本国・日本に行ってみたいと希望したことから話が持ち込まれたのである。

来尾した団員はクラブ・メンバー及び一般公募した家庭にホームステイして、日本の生活を体験した他、専門家であるメンバーの指導の下、書道や華道、茶道などにも挑戦した。

そして来日いちばんの目玉は、「尾道ベッチャー太鼓保存会」から直接和太鼓の指導を受けること。ちび太鼓は尾道滞在中に、ベッチャー太鼓のオリジナル曲『礎（いしずえ）』を伝授された。初めのうちこそライオンたちが通訳をしながらの作業だったが、次第に「太鼓」という共通言語で会話が通じるようになっていった。25日には尾道商業会議所記念館広場で、両太鼓集団によるジョイント・コンサートを開催。研修の成果を余すところなく披露し、大勢の観客からは惜しみない拍手が送られた。今回の訪問をコーディネートした我々も、この大成功に大きな満足感・充実感を得たのである。

ちび太鼓は目前に迫ったバンクーバー冬季五輪の公式応援団にも選ばれて、演奏を披露する。我が子の晴れ舞台のように楽しみである。（会長／大谷治）

福井葵ライオンズクラブ

カブトムシが育つ環境を作る

福井葵ライオンズクラブ（見谷英貞会長／84人）は2年前から4カ年計画で、市民の憩いの場である足羽山公園で、カブトムシが育つ環境を整える事業に取り組んでいる。発端となったのは、06年にグリーンセンターで開催した世界のカブトムシの標本展示会だった。この時、来場者にカブトムシをプレゼントしたのだが、早朝から長蛇の列が出来、用意した500セット（千匹）はあっという間に無くなってしまい、後日追加分を配ったのである。それならば、子どもたちが自然の中でカブトムシを観察したり採集したり出来る環境づくりをしようということになった。

初年度の07年はまずカブトムシの育成に適した腐葉土は何かという調査を行った。足羽山に飼育箱5箱を設置、①椎茸のほだ木の粉砕、②マイタケ菌床の廃材チップ、③外国産カブトムシを飼育したマット、④①＋②のブレンド、⑤②＋③のブレンドの5種類の腐葉土が2次発酵したマットを敷いた。体長約5ｾﾝﾁの地元産カブトムシの幼虫を50匹ずつ入れて生育状況を調べると、③以外は問題なく大きな成虫になった。

08年には2カ所にカブトムシの産卵床2基を設置し、一基当たり400匹の終令幼虫を確保出来た。そのうち200匹ずつを二つの飼育床へ移植、羽化させた。約80％が羽化している。

更に小学生を対象に、飼育したカブトムシを活用して生態や育て方を学ぶ勉強会や、カブトムシ夜間採集会、カブトムシの幼虫を掘り出そう、といった活動も行っている。勉強会終了後には飼育セットと羽化した雌雄カブトムシをつがいでプレゼントして大好評だ。

これらの活動には申し込みが殺到していて、父母の関心も非常に高いと思う。今後は子どもたちと一緒に、落ち葉を集めてカブトムシの産卵床を作ったり、落葉広葉樹の苗木を植樹し育ててみたいと考えている。

（環境保全委員長／川崎隆徳）

大阪府・八尾中央ライオンズクラブ

世界のユースへ河内音頭発信

335・B地区は10日間のユース・キャンプを実施している。これはホスト家庭もユースたちにとってもいちばん楽しい行事。しかしユース・キャンプ及び交換（YCE）委員にとっては多忙を極める行事でもある。今年も1年前から綿密な計画を練り、いよいよ7月17日からスタートした。

その中でも7月24日は八尾中央ライオンズクラブ（中江伊佐男会長／51人）が中心となり、大阪初、日本初、世界初のユース・キャンパー36人と共に踊る「河内音頭」が行われる。ユースたちは夕方、ウィング体育館に着くとすぐ浴衣に着替え。着物の帯や柄を見せ合いうれしそう。YCEのOB・OG及び当クラブのライオン・レディーの協力で、36人の本当にビューティフルなスタイルの浴衣姿が登場した。会場からはやんやの拍手、フラッシュの嵐。

後援して頂いた田中誠太八尾市長（当クラブ・メンバー）と会長のあいさつの後、いよいよ「KAWACHI DANCE」の始まりはじまり〜。ライオン・レディーを先頭とした小さな輪は瞬く間に大きくなり、ついに2重に。その中でユースたちは手まね足まね腰まねで踊り、我々なら何日掛かっても出来ない八尾の伝統ダンスをわずか1周、ものの5分でマスターした。各クラブの音頭取りさんの曲に乗り、本式の手踊りから豆かち踊り、いよいよラストは手をつないで輪になり、「また会う日まで」を大合唱。

メンバー以下応援の方々、総勢120人に参加頂いた。ライオンズ関係者のみならず、一方ならぬご協力を頂いた市職員及び市民の皆様に心から感謝申し上げる。

「良かったなぁ。また来年もやりますか？」

「ちょっと考えさせて（予算・体力）」

「まぁその時はその時や。皆さんご苦労様でした！」

（08年度地区YCE委員／正木猛司）

愛知県・一宮ライオンズクラブ

水ロケットコンテスト開催

一宮ライオンズクラブ（青山吉光会長／85人）は8月2日、日本宇宙少年団（YAC）東海地区連絡協議会との共催による「第1回日本水ロケットコンテスト東海地区大会」を開催した。YACは子どもたちを対象に、宇宙や科学に関する教育実践などを行っている団体。クラブ・メンバーにYACの分団長がいることから、数年前から協働して、子どもたちが夏休みに水ロケットを作って飛ばすイベントを行っており、今年は初めてコンテスト形式での開催となった。

会場は一宮市の光明寺公園球技場。当日は愛知及び静岡県内の、小学生から高校生までの選手たち120人が参加した。約半数がYAC団員、半数が一般公募だ。

朝9時30分に受付を済ませた参加者は数部屋に分かれ、説明を受けて水ロケット作りに挑戦。昼食を挟んで午後の競技では、工夫を凝らした自慢のロケットがずらりと並んだ。競技には飛距離を争うものと、50メートル先の着地点を目指して飛ばす2種目がある。ペットボトルに適量の水を入れて発射台に設置し、空気入れで圧力をかけ、引き金を引くと、ロケットは水の噴射による爆発的な勢いで、水しぶきを上げながら飛んで行った。中にはフェンスをオーバーして125メートルを超える記録も飛び出した。

それぞれの種目の上位5位までを表彰。その内2位までの計4人は、更に11月22日に愛・地球博記念公園で開かれる全国大会「愛・地球博記念日本水ロケットコンテスト2009」に参加する。彼らの幸運を祈っている。

（PR委員長／村橋福一郎）

栃木県・真岡いきいきライオンズクラブ

チャリティー・コンサート開催奮闘記

真岡いきいきライオンズクラブ（14人）は4月18日、真岡市制55周年記念として、世界的ピアニスト、ローランド・バティック氏によるチャリティー・ピアノ・コンサートを開催した。

昨年10月、当クラブ紅一点のライオン加々美貞子からの提案が始まりだった。バティック氏と親交があり、そうそうたる肩書きを持つ元県立高校の音楽教師、佐々木康普先生をアドバイザーに迎え、バティック氏との交渉成立。更にNHK交響楽団から弦楽四重奏団まで招請するというぜいたくな共演が実現することになり、我々は武者震いするような思いであった。また、国内外で歴史的価値のあるピアノの修復を手掛けている小野哲氏が真岡出身で、現在市内に工房を構えていることを知り、今回使用する市民会館のピアノを調律して頂くことになった。

コンサート当日、開場前から長蛇の列を成した入場者は、延べ８００人にも上った。プログラムはベートーベンの『月光』やモーツァルトの『鱒』など、誰もが聞き覚えのある曲が中心。バティック氏の絹糸のようなピアノ演奏も、四重奏団との共演もすばらしく、観客は微動だにせずに聴き入っていた。帰り際には皆さん異口同音に「すばらしい」「感動しました」と声を掛けてくださった。

当初は、結成3年目の小さなクラブにはとても不可能だと思われたが、多くの方のご指導ご支援と、関係者が目標に向けて一丸となって活動したことで、大成功を収めることが出来た。会員一同、多くの勉強をさせて頂き、かけがえのない貴重な「奮闘記」となった。最近の会員の話題は、「N響の誰さんがテレビで演奏していた」など文化的である。（08年度会長／神谷洋介）

高知中央ライオンズクラブ

浦戸湾七河川一斉清掃に参加

坂本龍馬見晴るかす土佐湾の支湾の一つ、高知の海の玄関・浦戸湾。7月19日はその浦戸湾に流れ入る7河川の一斉清掃日だった。「浦戸湾七河川一斉清掃」は、高知市制100周年記念事業として平成元年に開始されたものだ。水質浄化、親水・美化意識の高揚を図ることを目的としており、今年は、市民や市民団体等約8800人が参加した。

高知中央ライオンズクラブ（泉清博会長／43人）も、7河川の一つである鏡川の清掃に、今年もまた参加。2年程前までは、河川敷を住居としている人々の家庭ゴミがかなりあったのが、昨年からは様子は一変。彼らの住居はなくなり、緑の草生い茂る河川敷となった。今年もプラスティックなどのゴミ拾いより、雨で伸びた草刈りが主な作業となった。

朝7時から会員18人が参加。持参した草刈機で草を刈り、それを堤防の上に運び、持ちなれない鎌で刈り残した草を刈ったりと、汗だくになっての作業を1時間程行った。不燃ゴミは、川底から拾い上げた籐いすの残骸と、物干し竿のような棒ぐらい。この一斉清掃で回収したゴミの量は、可燃ゴミ80㌧、不燃ゴミ30㌧で、昨年よりも総量で1㌧少なかった。

市民の美化意識の向上と共に上流の山林の整備が進んでいることもあり、鮎漁の解禁日には、この鏡川で平成18年の調査開始以来最多の30万匹を確認したというニュースが流れた。

市民の川をゴミのない美しい川にしていくために、来年もまたより多くの会員と共に参加したい。

（PR委員長／中澤百合）

三重県・員弁ライオンズクラブ

ラオスに学校を建設

員弁ライオンズクラブ（藤田博会長／31人）は結成30周年事業として、ラオスの農村部カムハエ村に小学校を建設した。視察を兼ねた短期間のホームステイでは、私たち日本人の50～60年前の生活によく似たものを感じ、親近感を得て、ここに小学校を建設することで少しでも教育環境の改善になればと、会員一丸となって取り組んだのである。

まずクラブ内にILF30（員弁・ラオス・FOUNDATION30）基金を設けた。たくさんの方から遊休品を提供頂いてチャリティー・バザーを行ったり、334-B地区内クラブや近隣友好クラブから寄付金を頂いた。松尾精介ガバナー始め地区役員の深いご理解とご支援でLCIF交付金も承認され、建設目標額を達成することが出来た。

昨年6月に建設予定地の視察、建設業者の選定を経て、8月、着工。工事中も進捗状況把握のための視察を重ね、今年4月末、念願の校舎とトイレ棟が完成した。

5月12日、輝く太陽の光を浴びながら広々としたカムハエ村の地で、県副知事始め教育関係各位の出席の下、竣工式典並びに校舎贈呈式が盛大に執り行われた。喜びに満ちあふれた子どもたちの姿を見、我々メンバーも感無量だった。式典の最後に参加者全員で1本ずつ記念植樹を行った。この木はきっと大地にしっかりと根付きカムハエ小学校の子どもたちを見守りながら、彼らの夢と共に大きく育つことだろう。

瞳を輝かせ無邪気に跳び回るラオスの子どもたちを見ていると、最低限の教育も受けられない子どもが世界にたくさん存在するという現実を思い、少しでも彼らの役に立ちたいと願わずにはいられない。また、メンバー全員で大事業を成し遂げたという満足感、ライオンであることのすばらしさと誇りを改めて感じた。更に教育の支援には安定性と継続性が不可欠だと再認識させられた。

（幹事／中村武久）

兵庫県・豊岡こうのとりライオンズクラブ

公衆トイレをもっと気持ちよく

豊岡こうのとりライオンズクラブ(31人)は8月28日、豊岡市内18カ所の公衆トイレに竹の器を取り付け、花を飾った。女性クラブならではの感性を生かして、今年度アクティビティとして環境保全委員会が提案。クラブで実施を決定し、市に申請し活動の趣旨を説明すると、「ぜひともやって頂きたい」と快諾を得た。年4回、会員が手分けして季節ごとの花々を飾る予定である。

今回は初回だったので、各トイレに花器の取り付けも行った。公共施設であるトイレに穴を開けることなく粘着テープでつるせるよう、軽くて丈夫な素材で、出来ればあまり費用の掛からないものは何かと知恵を絞った。結果、会員宅から切り出した竹を提供してもらい、皆で竹の器を手作りすることになった。花は夏らしくハイビスカス(造花)にした。次回からは花器はそのままで、花のみを交換していくことになる。

市民の皆さんからは、トイレが華やかになった、気持ちよく使うことが出来るといった感想も頂いて、やって良かったと実感しているところである。これから秋の花、冬の花など何を飾ればより喜んで頂けるかと考えるのも楽しみの一つになった。

(会長/伊藤良子)

千葉県・四街道ライオンズクラブ

日章旗がつないだ世界平和への願い

昨年11月のこと。第2次世界大戦中、フィリピン・ルソン島で戦死された四街道市出身の日本兵・大熊武雄さん(当時24歳)が所有していた日章旗が、64年ぶりに遺族の元に返還されるというニュースが報道された。労して遺族を捜し出し、当時偶然持ち帰り保管していたという旗を戻してくれたのは、ノースカロライナ州に住む元アメリカ海軍兵のアール・ウートンさん。

当四街道ライオンズクラブ(29人)のL楢岡巌は大熊さんのご遺族と親交があり、今年度ミネアポリス国際大会に参加するため訪米するのを機に、ぜひウートンさんに直接お会いし感謝の気持ちを伝えたいと考えた。クラブとしても、時を経て生まれたこの日米交流に対し、協力することになった。

L楢岡とウートンさんご家族は7月4日、ウートンさんの娘さんが経営するレストランで面会した。L楢岡はご遺族の手紙や、塚田雅二08年度333・C地区ガバナー及び小池正孝四街道市長からのメッセージ、土産のアメリカ国歌を奏でるオルゴールなどを手渡した。ウートンさんは、彼の戦友が書いたという、戦争の空しさ、命のはかなさを綴った詩「見知らぬ敵」を贈ってくれた。その一部を紹介する(訳:星山春雄元330・C地区ガバナー)。

「彼、急速に落下せり/死と、破壊と、燃えたぎる号砲とともに/彼、はしゃぐ雲雀のごとく、落下せり(中略)

彼、わが敵、名さえ知らず/されど、われらと同じく人間なり/彼には、同じく母もあったであろう/おそらく、奥方も、子供も

地上のすべての人と同じく、息をしていた事もあり/一度は生を受けしが、今は冷たく死に絶えたり

されど、これは戦争であり、この土中の見知らぬパイロットの命は

戦争が奪ったものなり」

大熊さんのご遺族も、「旗が戻ってきたのは『戦争は絶対にいけない』というメッセージを発信しているようです。大切に保管して、平和を考えるきっかけになるように活用していきたい」と話している。

そして塚田ガバナーのスローガンが「広げよう世界平和と愛ある奉仕」。我々ライオンズも恒久的な世界平和を目指して活動を続けていきたい。

(会長/小島正一郎)

ライオン誌日本語版出版物

ライオンズスクール・シリーズ

●初級編・ライオンズクラブ入門
改訂版
第3版第1刷

入会したての新会員を対象に、これだけは知っておきたいライオンズクラブの基礎知識をまとめた。併せて「ライオンズ用語集」も収録。
A4判 64ページ 1部400円・送料実費

●中級編・クラブ運営の基礎知識
第3版第1刷

クラブ運営の基本を分かりやすく解説。知識を確認したり、セミナーや研修会などでグループ・ディスカッションに利用出来るワークシート付。
A4判 64ページ 1部400円・送料実費

●上級編・リーダーシップを養う
第1版第3刷

国際協会の総合的リーダシップ育成プログラムを基に編集。地区役員研修会などの副読本に、またクラブ会長や地区役員の指導力育成に最適。
A4判 64ページ 1部400円・送料実費

※ライオンズスクール・シリーズはいずれも50部以上ご注文の場合、送料無料（ただし、急ぎの場合は実費請求）。
●大口注文割引＝100～499部350円／500部以上300円

※お申し込みは下記注文書をお使いの上、郵送またはファクスでお願いします。地区名・クラブ名・お名前・ご住所・お電話番号をお忘れなく。
※ライオン誌ウェブマガジンからオンラインでのご注文も承っています。下記のライオンズ文庫注文フォームからどうぞ。
https://www.thelion-mag.jp/modules/inquirysp/index.php?op=2
※請求書・振込用紙は、品物に同封します。（大口注文の場合は別便で送付）

〒104-0045　東京都中央区築地2-2-1　築地細田ビル7階　ライオン誌日本語版事務所（FAX：03-3546-2630）

キリトリ線

ライオン誌日本語版出版物　注文書

●ライオンズクラブ入門 …………　部
●クラブ運営の基礎知識 …………　部
●リーダーシップを養う …………　部
●ウィ・サーブ …………　部
●ライオニズムよ永遠に …………　部
●『ライオン』誌創刊号復刻版 …………　部

地区名 33 -	クラブ名	お名前（クラブで注文の場合は不要）
ご住所 〒 -		お電話番号

●獅子吼（ししく）
①仏が説法するのを、獅子が吼えて百獣を恐れさせる威力に例えていう語。
②大いに熱弁をふるうこと。（広辞苑）
●投稿要領→56ページ

ライオニズムと奉仕活動

森　賢太郎（新潟県・村松）

「人や国が憎しみ争っていようとも、春になれば桜は変わることのない花を咲かせる」

　この言葉は10年前、あるグラフ誌の桜特集を見ていた時に目にとまった言葉である。

　我が町の村松公園は、新潟県の桜の名所で、日本のさくらの名所１００選にも選ばれている。また、村松ライオンズクラブ（当時会員数27人）が、結成20周年の式典を４月に迎えようとしていた矢先のことであっただけに、今でも忘れられない言葉である。

　来年４月には30周年を迎えることになるが、この10年間に会員数は16人まで激減してしまった。

　昨年、ブランデル国際会長が「私たちは小さなクラブだからと語るクラブも、地域社会にとって掛け替えのない存在です。ライオンズを失った地域社会は、さまざまな面で悪化の一途をたどることになるでしょう」と語られるのを聞いた。当然、少人数クラブとしては身につまされる思いである。

　国際会長は、ライオンズクラブが行っている奉仕活動の、ハードパワー的な面が消失されるから「ライオンズを失った地域社会は、悪化の一途をたどる」と言われたわけではない。それは、ライオンズクラブと地域社会との関係が、単なる奉仕活動というハードパワー的な面のつながりだけではないからである。

　国際会長は、ライオニズム、また善意といったソフトパワー的な面が喪失されていくことを「悪化の一途をたどる」と指摘されたのだろう。ライオンズクラブに限らず、さまざまな奉仕団体の、善意といったものが社会の秩序を保っていることは、度々この獅子吼にも投稿されてきたところである。

　このことは、小宇宙と言われる私たちの体の仕組みからも推察出来る。私たちの体を作っている約60兆の細胞も、単独で存在している細胞は一つもなく、互いに関係し、依存し合いながら全体として調和の構造が成されている。私たちの体の仕組みがそうであるように、また人間社会もそうであるように、自然環境もそうであるように、歴史がそうであったように、そこには万物を貫く、共生、共存、調和といった秩序が厳然とあるように思う。

　そして、奉仕やボランティアの精神も、それが基軸となっているのではないだろうか。そう考えると、奉仕は「好き、嫌い」といった次元のものではない。

　それは、人類やライオンズが目指すテーマであり、またライオンズは、その推進を図るべき立場であるがゆえに、その砦が崩れていくことに、国際会長は「悪化の一途をたどる」という言葉で強調されたのだろう。ライオンズ・ヒムにも、戦の魔手となって武器を取ることから、知性をもって国を守れとうたわれているように、奉仕の砦を築き、拡大していく以外に、地域の安全や平和な社会を築いていくことは出来ない。

イラスト／小川和政

獅子吼

ライオンズクラブ創立以来、人や奉仕活動といった、ハード的な面は時代と共に変化しても、ライオニズムといったソフト的な面は、春になれば桜の花が咲くように、これからも変わらないものである。

私もその原点に立ち返り、まず自分自身の砦をしっかりと築かなければと考えさせられた次第である。

岳父の思い出

粕川　俊彦（山形県・高畠）

２００１年1月26日午前10時頃、当時332・E地区ガバナーだった南陽ライオンズクラブのライオン大塚孝元は診察中だった。

急に出現した腹痛は、今までに経験したことのない激痛だったという。救急車を呼び、ライオンズクラブに入会したばかりの私（次女の娘婿）が、当時勤務していた公立高畠病院へ行くよう指示したというが、腹痛が出現した後の記憶は本人には喪失したままである。息子の勤務地の朝日町立病院までは救急車でも1時間はかかる。公立高畠病院までは普通に車で行っても15分である。当然の選択だった。

救急車で岳父が来院するという連絡を受け、私は緊急検査の手配をして待っていた。腹部レントゲン写真で尿管結石が疑われ、CTも行ったが、腹痛の原因は分からなかった。痛みは幾分軽快していたため、とりあえず入院となり、絶食、輸液で様子を見ることになった。

3日前から便秘をしていたライオン大塚は浣腸をすれば良くなると思い、主治医の私に無断で担当の看護師に浣腸するように指示した。担当看護師が、医師であるライオン大塚の指示通りに浣腸をしたのは昼頃だった。その後、いったん治まっていた腹痛が再度激痛となり、私が診察したところ腹膜炎になっており、緊急手術が必要と判断した。

ガバナーの息子へ電話を入れたが、手術中で、すぐには駆けつけられないという。私は、親思いの息子が執刀すべきと思い待つことにした。息子が到着してすぐに緊急手術が始まった。診断は特発性S状結腸穿孔だった。ガバナーとしてのストレスもあり、3日間排便がなかったという。便秘が原因で便がたまりすぎて腸に穴が開いたのだった。穿孔部に接近して大腸がんも見つかった。がんを含めて穿孔部を切除し腸をつないだが、全身状態が悪いため、腹の中を十分に食塩水で洗った後、人工肛門を作って腹を閉じた。

手術は無事終わったが、手術開始までの時間経過が長く、術後重篤な状態となったため、翌日、山形大学付属病院集中治療室へ救急車で転院となった。集中治療室で生死をさまよったが、息子の必死の治療でライオン大塚は九死に一生を得た。その後、公立高畠病院に再度転院、順調に体力は回復し、3月には人工肛門のまま退院となった。

２００１年の332・E地区年次大会は、ゴールデン・ウィークただ中の4月30日に決定していた。ライオン大塚にとって、年次大会はガバナーとしての晴れ舞台である。4月初め、突然、「ガバナーとして年次大会は自分がする」と言い出した。「まだ手術したばかりだし、人工肛門のままでどうするの」という周囲の声に耳を貸さず、ライオン大塚はガバナーの任務を全うせねばとの強い意思の下、自ら年次大会を執り行うことになった。

私が緊急事態に対応出来るよう、そばに待機することを条件に行われた年次大会は、滞りなく無事に終了した。年次大会当日、ライオン大塚が人工肛門の状態だったのは家族以

外ほとんど知らないことと思う。

十分に体力が回復してからの7月に人工肛門を戻す手術を行う予定だったが、幸い回復が早く、本人の希望もあり、6月12日にその手術が行われた。

高齢のライオン大塚にとって、ガバナーとしての任務が体にかかる荷重は、前半の半年間だけでも並大抵のものではなかったのだろう。国際大会や東洋・東南アジア・フォーラムなど、海外で発症しなかったのはラッキーだった。

後半はほとんどガバナーとしての任務を行えなかったが、年次大会にはこだわりを持ち、なんとか全う出来たのが唯一の救いだった。

三途の川を渡り切る寸前まで行き、戻ってきたライオン大塚は、昨年暮れから再度病魔と闘うことになった。が、2度目の奇跡は起こらなかった。そして本年5月11日、83歳の生涯を閉じた。

岳父がガバナーの時にライオンズクラブに入会した私にとって、岳父はライオンズ会員としての鑑である。一時は退会も考えたが、岳父を目標にそれ以上の社会への奉仕が出来ればと思うこの頃である。

シニア・ライオンズ、いきいき輝き続けよう。いつまでも。

澤 博一（兵庫県・神戸シニア）

第4回全国シニア・フォーラムin神戸が、5月12日、クラウンプラザ神戸で開催されました。

社会奉仕に強い関心を持つ熟年男女を中心に、この15年間で全国に約40のシニア・ライオンズクラブが誕生しています。

この流れの中で6年前、サッポロシニアライオンズクラブから、結成5周年記念事業の一つとして、シニア・ライオンズクラブ・フォーラム開催の呼び掛けがあり、推進母体として日本シニアライオンズクラブ連絡協議会が結成されました。

これまでに、札幌、鹿児島、横浜と、2年ごとに全国フォーラムを開催。運営、会員、奉仕事業など、共通の問題解決と親睦に成果を上げてきました。

今回は335複合地区がホストを引き受け、尼崎、芦屋クオリティ、神戸（A地区）、大阪、岸和田、関空（B地区）、京都（C地区）の各シニア・ライオンズクラブの協議で、開催地は神戸に決定、神戸シニアライオンズクラブが主管クラブとなりました。

大阪湾を取り巻く7クラブ、16人の実行委員会は、ほとんど初顔合わせながら、長年の旧知のごとく打ち解け、見事な連携で準備全般を進めました。

当日は、井戸敏三兵庫県知事、矢田立郎神戸市長、八嶌隆335複合地区ガバナー協議会議長、大村哲郎335・A地区、中村房雄335・B地区、橋本隆夫335・C地区各ガバナー、及び335・A地区名誉顧問4人、シニア・ライオンズクラブから初のガバナーに就任した星山春雄330・C地区ガバナー（熊谷シニア）、そして地元の地区並びにクラブ役員の皆様をお迎えし、全国22シニア・ライオンズクラブ会員を加え、250人の参加を得て、過去最大の規模となりました。

来賓代表の方々から温かい祝福と激励を頂き、また恒例の代表クラブ（今回は千葉県・船橋、福岡、神戸各シニア・ライオンズクラブ）による多彩な奉仕活動報告の後は、俳優大村崑氏の基調講演「高齢社会における幸福論『いま幸せでっか』」を楽しみ、軽妙な語りを全員爆笑の中で傾聴しま

した。大村氏は、20歳代で片肺となった後も極めて元気な77歳の実体験を通して、明るい気持ちこそ健康の柱であり、何でも「面白かったなー」と言える人生を楽しみましょう、と閉じられました。

　続いて、新井一裕協議会代表幹事（大宮シニア）の司会で、大村氏と現・元ガバナーのパネリスト5人により、「高齢者による奉仕活動」についてのパネル討論が行われ、最後に全体会議で「神戸宣言」を採択し、今回の大会テーマ通り「シニア・ライオンズ、いきいき輝き続けよう。いつまでも。」と誓い合って、終会となりました。

　夕刻から親睦会に移り、盲導犬と共に全国で活躍中の音楽家・前川裕美さんのピアノとヴォーカルや、地元神戸のじぎくライオンズクラブ有志による太鼓を楽しみつつ、全国の同志と再会を喜び、親交を深めた3時間は「また会う日まで」の大合唱と拍手の中で、お開きとなりました。

　シニア・ライオンズクラブは、未曾有の社会不安の中にあっても注目され、引き続き発展が期待されるセクターです。各地に誕生の芽生えもあり、情報提供などの支援も可能です。このフォーラムが、更にシニア・ライオンズの誇りを高め、達成感をエネルギーとして、いきいき輝き続ける契機となることを願っています。

『ライオン』誌で新しい感覚を!!

児玉　憲幸（宮崎県・日向）

　今年の梅雨は地域によって差異がはっきりしているようです。

　西日本や九州地区は空梅雨気配なのに、沖縄は梅雨前線の停滞で洪水、土砂災害警報中。また、関東以北は例年より降雨量が多く、農作物の被害の心配もある模様です。しかし、台風シーズン到来の季節でもあり、南九州は油断もすきもありません。

　さて本日は『ライオン』誌について感じたことを申し述べてみます。

『ライオン』誌と聞いただけでも硬すぎて、難しい話に聞こえてきます。

　あえて取り上げるのは、今、ライオンズクラブが直面している会員減、高齢化、奉仕作業の時代的価値観の変化などに、『ライオン』誌日本語版が一生懸命に取り組み、問題解決の指針になるための努力が感じられるからなのです。

　かつて私も、『ライオン』誌に数回投稿して、ささやかな喜びを味わっておりました。そんな中、昨年の1月号から、本誌が従来のB5判からA4判に切り替わった途端、「論点」、「俳壇・歌壇・柳壇」、「マイベストショット」、「ライオンズギャラリー」などの約10ページが、新しい編集方針によって消去されて淋しさを覚え、更に購読率の低下を心配しておりました。が、最近の『ライオン』誌を読むにつけ、改革の意図

するところがだんだんと分かってきた次第です。

すなわち、現在、ライオンズクラブが抱える諸問題を特集「THEME　○○○」として取り上げ、現状分析、問題点の解明、対処法、解決事例の紹介と、分かりやすく編集していることに、感服しているところです。

直近の事例では4月号「環境問題」、5月号「明日を開く若い力」、6月号「高齢社会」とあり、予告を見ると、次号は「例会」となるようです。

これらについて、各地区キャビネット会議やリジョン会議、ワークショップ等でも取り上げられることはあまりなく、取り上げたとしても深く追求するまでに至っておりません。従って、会員減少や会員増強問題にしても、いい加減な対策で終わっているのが現状でしょう。思いつきやはったりの報告会議なら、しない方がましでしょう。

ましてや、年次大会の分科会において問題提起もされず、活発な意見も出ないようでは将来が案じられるというものです。

キャビネットやリジョンのトップ・リーダーは小手先の改革で終わることなきよう、この辺で目覚めるべきではないでしょうか。

『ライオン』誌は言うまでもなく、ライオンズクラブ国際協会の公式機関誌（日本版）であり、最新情報と課題が集約されたクラブ運営の手引き書でもあります。従って、諸会議や例会で大いに活用されてこそ真価を発揮することになります。

会員一人ひとりが新しい感覚を身につけるために、もっと『ライオン』誌に親しみを持ちましょう。

青田の表紙

新保　忠雄（新潟県・新津）

獅子吼に載っている投稿はいつも楽しみにしているのであるが、今回は自分も投稿してみようという気持ちになった。

本誌7月号表紙に青田の写真が載っていた。何かすぐ自分の身の回りの風景のような気がした。巻頭の解説をみると新潟県高柳町とある。やはりそうかと思った。また、ライオン誌日本語版編集長が新潟県・新発田菖城ライオンズクラブのライオン坂井正であることを思い出した。氏が、ぜひ郷土の風景をと思ったのではないかと勝手に想像した。

かくいう私は新発田のすぐ近く、新津ライオンズクラブの会員である。すくすくと、青々と早苗しげる稲生の光景。時あたかも7月上旬、梅雨のさなかである。

郷土の哲人良寛に次の句がある。

「五月雨の晴れ間に出て眺むれば　青田涼しく風渡るなり」

私には良寛について何の特別の知識もない。勉強したわけでもない。しかし、この句はこの地に住む者として、本当にありのまま、何の説明も要せず分かる歌なのだ。

7月号表紙の写真を見て、思わずこの句が口をついて出た。広い越後平野、見渡す限り植えられた早苗、その早苗を波のように揺らして渡る風。何という涼しい景色。毎年繰り返す光景であるが、私たちと水を張った田んぼ、青苗、そして秋の黄金の稲穂。長い長い歴史を経た、切っても切れない生活の光景。

「青田涼しく風渡るなり」

本当にホッとする瞬間である。

Close up U50

エクステンション自体が面白くなるような方法論を考えたい

■辻村昌弘

つじむら・まさひろ　1962（昭和37）年6月15日静岡県浜松市生まれ。2006年7月浜松南ライオンズクラブ入会。2009-10年度334-C地区リサーチ・中長期計画委員長。ライオンズクラブ以外にも消防団、日本善行会など、地域のボランタリー活動に積極参加している。㈲富士美容院取締役。47歳。

【入会のきっかけ】家の都合で東京から浜松に戻って3年目、厄年が終わって何かボランティアをやりたいと思っていたところに、仕事でお付き合いのあった方から誘われ入会しました。

【入会してみて】最初はつまらなかったですね。自分なんか入っていいんだろうかと緊張していたんですが、皆さんすごく優しく、気を遣われているのがひしひしと感じられました。新会員が入っても、あまりうるさく言うと定着しないと考えられたのでしょうが、逆に拍子抜けしてしまったという感じです。

【ライオンズで得たもの】「感動」ですかね。いろいろあるんですが、例えば国際大会です。ライオンズに入る時、勧められたことは全部やろうと決めました。それで、ある例会で幹事が「国際大会があるから行ける人は行ってください」と。僕はみんな行くもんだと思って申し込みました。そうしたら誰も行かないじゃないですか。それでも実際に参加してみたら、震えるような感動を味うことが出来ました。特に閉会式は感動の連続。最後の地区ガバナーの就任式でエレクトのリボンを外し、キャビネットの方たちがすごく喜んでいるのを遠巻きに見て、いずれは僕もあの輪の中に入りたいと思ったものです。

【今後の抱負】今年度、地区のリサーチ・中長期計画委員長を仰せつかり、早々に念願が実現したんですが、ずっとライオンズを続けるにしろ、何度もキャビネットに入れるとは思っていないので、とにかく一生懸命やります。MOVE TO GROWです。ガバナーからはエクステンションを考えてくれと言われ、最初は会員減少の中、そんなこと誰も喜ばないと思ったんですが、今は活力あるクラブを作って起爆剤にしたいと考えを改めました。具体的にはフィットネスクラブ感覚で参加出来るようなクラブを想定しています。アラサーとかアラフォーとか言うじゃないですか。そういう人たちは体を鍛えるためにフィットネスクラブに入っていたりしますが、同じようにメンタル面での自己成長を求めたり、ほっこりしたものを味わうためにライオンズに入るという図式もあると思うんです。誰かの役に立ちたい、人とつながりたい、と考える人はたくさんいます。閉塞感やマンネリ化が言われる中でも、みんなライオンズが好きで続けています。それだけ魅力もあるわけで、そこを伝えていければ、おのずと展望は開けてくるのかなと思っています。

【津田兼資会長から】入会3年ながら、ライオンズクラブに対する情熱には感服しています。国際大会やOSEALフォーラムにも積極的に参加し、またインターネット等で情報収集をして、他のライオンズとの交流もしています。将来を楽しみに大事に育てていきたいと思っております。

写真・構成／鈴木秀晃

※Close up U50（Under50）は50歳未満の若手会員に焦点を当てた企画です

ミネアポリス国際大会の閉会式で

ippin おすすめの

第2回　福井県敦賀

◉

手漉きおぼろ昆布

「ご飯の上にバサッとかけ、ご飯を巻きながら食べるのがいちばん！」

そう力説する今月のナビゲーター。ご飯を巻くのは、敦賀名産の手漉きおぼろ昆布だ。

敦賀は江戸時代、北前船の寄港地として栄え、北海道や東北の産物を京や大坂へ運ぶ中継地となっていた。昆布はそうした物資の中でも重要な食材の一つで、北前船の道程は「コンブロード」とも呼ばれた。そして敦賀では昆布加工も発展。おぼろ昆布、とろろ昆布などの加工昆布では日本一の産地である。

ナビゲーターが案内してくれたのは、そんな加工昆布の老舗ハシモト昆布（橋本禮次社長）だった。橋本社長は敦賀みなとライオンズクラブのチャーター・メンバーで、07年度には地区会計を務め、ナビゲーターと共にキャビネットを支えた。

「おぼろ昆布には真昆布を使います。まず天日干しした良質の昆布を酢に浸して柔らかくします。とろろ昆布もおぼろ昆布も、これを削って作るわけですが、とろろが機械で削るのに対し、おぼろは人間が包丁を使って板状に薄く削ります。口の中で溶けるようなおぼろ昆布を漉くには、熟練した職人技が必要です」

橋本社長はそう前置きし、自ら実演して見せてくれた。滑り止めの着いた愛用の白足袋で昆布をしっかりと踏み、昆布包丁を持った腕を右脚で押し出すようにして削る。そうすることで腕を固定し、幅広で長いおぼろを削ることが出来るのだという。

地元ではおにぎりを巻いたり、お吸い物にしたり、素材そのものを味わう食べ方が一般的。運動会や遠足では、のりではなく、昆布で巻いたおにぎりが定番。コンビニでも、他の地方ではついぞ見かけない「昆布おむすび」が、北陸限定おにぎりとして売られている。

「朝の吸い物は、おぼろ昆布にお湯をかけ、醤油をチャッとたらして完成。おぼろ昆布はふわっと溶けるほどの薄さですが、真昆布のうまみを最大限に引き出して甘みと香りが口いっぱいに広がります。お試しあれ」

とナビゲーター。

●今月のナビゲーター

河野慎一

福井県・敦賀みなとライオンズクラブ。96年入会。07年度334-D地区キャビネット幹事。敦賀のことなら何でもござれという生粋の敦賀ッ子。河野損害保険事務所代表。

山形県鶴岡市

和竿にも、鞠にも感じる庄内、藩政時代の面影

■文／砂山幹博　写真／田中勝明

歴代の藩主らが愛した庄内竿。根の形の善し悪しは、鑑賞の対象にもなった（致道博物館）

刀を竿に持ち替えて

倹約、学問、産業、田畑の開墾。江戸時代、諸藩は実にさまざまな奨励政策を採っているが、庄内藩が採った策は他に類がない。文献によると文政10（1827）年に10代藩主、酒井忠器が奨励したのは磯釣り。長く平和が続いたことで武士道が廃れつつあることを憂い、行軍のための足腰の鍛練にもなるという理由で、釣りに出掛けるよう藩士に促した。

酒井氏の居城である鶴ケ岡城（現在の鶴岡市）から最も近い海岸でも三里（約12キロ）は離れている。山道が続くこの行程を藩士は竿を担いで歩くのだ。とは言っても、今とは違ってそれほど娯楽のない時代。まず間違いなく磯釣りは藩士らの血を騒がせたはずだ。まだ見ぬ獲物を思い描いてはほくそ笑む者、先に釣り場所を取られないように夜中のうちに城下町を後にする者も少なくなかったろう。

しかし、藩主の勧める磯釣りは体力と胆力の鍛錬の場、娯楽ではない。それゆえ、釣りに行って自分の不注意で海に落ち、ケガをすると減給されるなど、厳しい処分を受けることもあった。それでも釣り人気は衰えず、後に武士だけではなく庶民にまで広がり、ますます盛んになった。

磯釣りの話を鶴岡の人にたずねていると、「歩いて釣りに行く」という行為が、意外にもごく最近まで続いていたことを知り驚いた。

「私が子どもの頃はまだ学校で釣り遠足というのがありました。お彼岸が過ぎた頃、各自竿を持って釣り場まで歩くんですよ」と思い出話に目を細めるのは、トキワ釣具店の常盤敬一さん。庄内地方独特の和竿「庄内竿」を作る竿師である。

江戸時代には庄内竿を作る名人が多くいて、こうした名人に習って釣り人自らが竿をこしらえた。出来の善し悪しに一喜一憂しては、名刀を誇りにしたように名竿を自慢し合ったという。常盤さんが子どもの頃でもまだ多くの竿師がおり、鶴岡市内の釣具店ならどこでも庄内竿を作って販売していた。しかしそんな竿師も現在は、常盤さんを含め数人となってしまった。

竿になるのは千本に1本

漆をかけずに木地を生かした美しさが印象的な庄内竿は、根元から穂先まで1本の竹で作られた和竿である。徒歩で釣りに行った時代には継ぎ目がない延べ竿であったが、列車に揺られて出掛ける時代になってからは、持ち運びに便利なように2〜3本に分解出来る継ぎ竿が主流となっている。

材料はこの地方だけで採れる苦竹。

「祖母らが作るその脇で、見様見真似で覚えた御殿鞠作りも今年で27年目」と話す市川由喜さん

弾力性があってしなりも良く、しかも強いとあって釣り竿には最適だという。かつては家屋の隅などに普通に生えていた身近な竹であったが、最近は苦竹を探すだけでも一苦労する。竹藪の中に入り、竿師自らこれを採取して、手間暇を惜しまず一振りの竿に仕上げる。

「竹藪の中を鉛筆のようにすっと真っすぐ伸びている竹を探しますが、こうした竹は100本に1本あるかないか。良いと思って持ち帰っても、乾燥中に形が変わったり、虫に食われたりします。採取した竹で使えるのは1割程度というところでしょうか」（常盤さん）

つまり千本で一振り。しかも竹の自然乾燥には少なくても5〜6年、曲がり癖がなくなるまで竹に火をかけて伸ばす「荒伸し」に3年はかかるため、竹が竿になるまでには実に8年以上の歳月が必要となる。

素材確保の難しさと職人の手にかかる時間の長さから、江戸の頃から高価な竿として知られた。中には、遺言竿として代々引き継がれる家宝となる名竿もあった。作り手がほとんどいなくなった現在は手に入りにくいということもあり、一振り数十万円以上の値がつくことも珍しくはない。

その高価な竿を持たせてもらったが、「こんなに細く華奢な竿で、かかった魚を上げられるのか」と驚いた。聞くと、狙う魚は釣り魚の中でも引きの強さで知られるクロダイだというから、更に驚く。

「クロダイがかかろうものなら、どこまでが竿でどこからが糸か分からなくなるほど大きな弧を描いて竿が曲がります。これこそが庄内竿の醍醐味」と常盤さんは言う。竿の力で獲物をねじ伏せるのではなく、竿自体が持つ弾力で獲物のパワーを吸収し、力尽きるのを待つのである。そういえば、ここ庄内では釣った獲物のことを「勝負」と呼ぶ。釣りが武道に匹敵するためこういう言い方が残っているが、庄内竿を介してみれば「勝負」の意味がすんなり理解出来る。

庄内藩14万石の面影を巡る

藩士たちが釣りにいそしんでいる間、留守を預かる女性たちが片手間に作っていたのが、郷土が誇る民芸品「御殿鞠」である。鶴岡で御殿鞠作りが始まったのは江戸時代の初め頃というから、釣りの奨励より歴史が古い。もともとは投げたりついたりして楽しむ遊具であったため、鞠が弾むように芯にはもめん綿や真綿などが詰められていた。その後、投げて音がするように中に小石や貝殻が入ったり、見た目の美しさが競われるようになり、繊細で色鮮やかな今の姿へと変化していく。

旧藩主酒井家の御用屋敷と日本庭園が、ほぼそのまま残されていた（菅家庭園）

庄内藩独特の気風を育んだ藩校致道館。少人数を対象とした個別指導を採ったため、数多くの部屋が設けられている

「現在の御殿鞠は主にお土産用ですから、紙やビニールの袋に入れたもみがらを中心にして、白い糸で巻いていきます」。御殿鞠制作者の市川由喜さんは、白い糸の層を丸くなるように手で押しながら厚さ5ミリ程度に巻き上げていく。

明治になって武家社会が崩壊し、丈夫でよく弾むゴム鞠が登場すると、御殿鞠の人気は失速。一時期全く作られなくなっていた。しかし、その美しさを忘れられなかった市川さんの祖母が、幼い頃にそのまた祖母から伝えられた作品と技法を頼りに御殿鞠を再興。今に至っている。たった一人の感性によって、伝統は継承されたのだ。

庄内竿や御殿鞠以外にも、城下町鶴岡には藩政時代をしのばせるものがある。古い町並みや歴史的建造物が点在する風景もその一つだろう。最近では映画のロケ地としてこうした風景が切り取られることも多い。鶴岡出身の直木賞作家、藤沢周平の短編小説を映画化した『たそがれ清兵衛』（山田洋次監督）や、第81回アカデミー賞外国語映画賞を受賞した『おくりびと』（滝田洋二郎監督）など話題作のシーンに古き良き庄内の面影を見ることが出来る。

鶴岡一の豪商・風間家の屋敷は、明治29年の丙申の年、武家屋敷跡に建てられたことから「丙申堂」と名付けられた

郷土自慢・クラブ自慢

鶴岡ライオンズクラブの郷土自慢は、庄内平野のお米。出羽三山と鳥海山の麓に広がる肥沃な大地に育まれた庄内米は、江戸時代から知られるブランド米。近年「はえぬき」「どまんなか」の名で売り出されている庄内米だが、この秋、米どころ山形を全国にアピールする県産トップブランド米として大きな期待が寄せられている新品種がデビューする。その名も「つや姫」。サッカーJリーグのモンテディオ山形が今季、ユニフォームの胸にロゴを入れているのでご存じの方もいるかと思う。これまでにも庄内平野が生み出した稲の品種は多数あり、こうした稲の譜系は、各種農具などと共に松ケ岡開墾記念館（写真）に展示されている。

▼鶴岡ライオンズクラブ（横川七七一会長／41人）＝1963年10月22日結成／スポンサー：酒田ライオンズクラブ

読者プレゼント

骨髄バンク支援の著書とカレンダーを10人に

THEME「骨髄移植」(5ページ)に登場した木村公一(茨城三和ライオンズクラブ)の著書『未来の夢は何ですか? 生きることです。』と、中溝裕子(東京ワンハンドレッドライオンズクラブ)の「2010年絵手紙カレンダー」をセットにして、10人の読者にプレゼントします。

鶴岡の吟醸酒を5人に

「ふるさと探訪」(51ページ)で紹介した山形県鶴岡市、冨士酒造(加藤政芳取締役:鶴岡朝暘ライオンズクラブ)の特別大吟醸「古酒屋のひとりよがり」(25度/900ミリリットル)をプレゼントします。冨士酒造は創業230年、伝統の技を受け継ぐ蔵元。その代表作である「古酒屋のひとりよがり」は、蔵人が誇りをかけて手造りで醸した数量限定の吟醸酒。豊かで上質な味わいの逸品です。

応募要領:はがきに「骨髄移植」「ひとりよがり」といずれかご希望の品を明記し、住所、氏名、電話番号、クラブ名をご記入の上、ライオン誌プレゼント係あてにご応募ください。本誌ウェブマガジン(www.thelion-mag.jp/modules/inquirysp/index.php?op=0)からも応募出来ます。本誌へのご意見、ご感想もお書き添えください。締切は10月末日。応募多数の場合は抽選。当選のお知らせはプレゼントの発送をもって代えさせて頂きます。

伝言板

ウェブ版「クラブ・リポート」

『ライオン』誌ウェブマガジン(www.thelion-mag.jp)の「クラブ・リポート」では、アクティビティ、例会などクラブ活動に関するオンライン投稿を受け付けています。投稿にはIDとパスワードが必要になりますので、初めて投稿される際にはユーザー登録を行ってください。投稿の内容は、本誌スタッフが確認した上で公開されます。ウェブ版への投稿は同時に本誌「クラブ・リポート」欄への投稿としても受け付けます。

ライオン誌事務所来訪者芳名録

日付	クラブ	氏名
7 30	千葉県四街道	楠岡 巌
8 7	東京新宿北	梅沢 忠男
8 7	千葉県四街道	楠岡 巌
8 11	埼玉県鴻巣	塩谷 睦夫
8 21	高知桜	二宮 邦江
8 21	兵庫県神戸みなと	団 英男
8 24	東京八王子陵東	近藤 正彦
8 24	東京田園調布	佐原 幸雄
8 24	東京三軒茶屋	藤村 貞夫
8 24	千葉県松戸	林 護
8 24	千葉県白井	高城 靖雄
8 25	兵庫県三木中央	有野 勇
8 25	千葉県四街道	楠岡 巌
8 28	東京	池崎 道男

2009年11月号予告

THE Lion

THEME **最新エコ事情**

低炭素社会の構築に向けて、化石燃料から二酸化炭素などの有害物質を排出しないクリーンエネルギーへの転換が進みつつある。太陽光や風力、地熱などの自然エネルギーの最前線をリポート。また、持続可能な社会のモデルとして注目を集めている「エコ村」の暮らしぶりを紹介。

ライオン誌投稿要領

▼原稿は誌面の都合で編集したり、掲載出来ない場合があります。原則として原稿の返却は致しません。返却希望の場合はその旨を明記してください。

▼電子メールでの写真投稿は長辺1,600ピクセル程度のJPEG最高画質で。

▼住所、氏名、クラブ名を明記。

■**クラブ・リポート**32〜41ページ:アクティビティ、例会など、クラブの活動を具体的に800字程度で。関連写真があれば添付。

■**獅子吼**43〜47ページ:会員及びその家族によるエッセー、提言など。1,600字程度。

送付先:
〒104-0045
東京都中央区築地2-2-1
築地細田ビル7階
ライオン誌事務所
Fax:03-3546-2630
E-mail:edit@thelion.jp

Official publication of Lions Clubs International

Published by authority of the Board of Directors in 21 languages - English, Spanish, Japanese, French, Swedish, Italian, German, Finnish, Korean, Portuguese, Dutch, Danish, Chinese, Norwegian, Icelandic, Turkish, Greek, Hindi, Polish,Indnesian and Thai.

Lions Clubs International Headquarters
300 W 22ND STREET OAK BROOK IL 60523-8842 USA
TEL.(630)571-5466 FAX.(630)571-8890
Web site: www.lionsclubs.org

ライオン誌日本語版事務所
〒104-0045 東京都中央区築地2-2-1 築地細田ビル7階
TEL.(03)3542-9571（代）　FAX.(03)3546-2630
E-mail. edit@thelion.jp
Website:www.thelion-mag.jp

2009-10年度編集長方針

ライオン誌
日本語版編集長
◉
瀧澤嘉門
（北海道・札幌ポプラ）

昨年度のライオン誌日本語版委員会は世界不況の下、会員の減少、円高による為替差損による減収を踏まえ、印刷費等の圧縮に努めて参りました。

会員減少の原因はライオンズ固有の問題だけでなく、地域・職場・家族が壊れかけている社会、不況や高齢化、個人主義など日本が抱えている諸問題によるところも多いかと思われます。

今年度は全国各地に広く根差しているライオンズクラブの奉仕活動が地域活性化に役立っている姿を紹介するページを充実させ、1人でも多くの会員増強につながる魅力ある誌面にしたいと考えます。

以下、本年度の編集長方針を具体的に提示致します。

1　成長するために前進しよう、行動しようというエバハルト・J・ヴィルフス国際会長のテーマ「MOVE TO GROW」の浸透を図る。

2　国際協会の課題の一つは「会員増強」である。昨年度スタートしたグローバル会員増強チーム（GMT）を誌面を通じ引き続き後押しする。

3　坂井正前編集長が公式版編集長会議に出席した際に提案された「若い会員、女性会員増のこと、アクティビティ事例を多く掲載すること」はここ数年の本誌でも取り組んできた。よって今後も引き続き推進する。印象深かった若手会員フォーラムのフォローアップも考えたい。

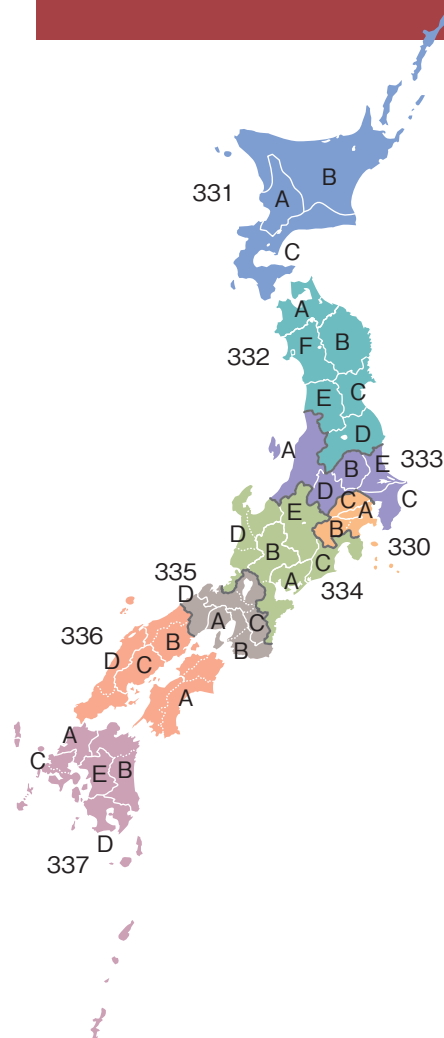
4　読者モニター制度は今後も継続し、記事の反響を寄せてもらうと共に、編集や企画の情報提供をお願いする。また読者モニターを含む若手会員の意見を聞きその声を誌面に反映させたい。

ライオンズクラブの専門誌として、公式機関誌として、読者会員が関心、興味を持つ話題を誌面に取り上げて参ります。杉本忠夫、不老安正両国際理事からの国際的な情報を踏まえながら、委員8人と事務所長を中心とした職員と共に「癒やされる誌面づくり」に励みます。

日本のライオンズ

2009.7.31　ServannA報告による

地区	都道府県	■クラブ数	■会員数	(女性会員)	期首からの入会	期首からの退会	期首からの増減
330-A	東京	200	5,485	(791)	112	67	45
330-B	神奈川･山梨･東京	188	5,141	(481)	56	110	-54
330-C	埼玉	102	2,626	(215)	24	27	-3
330	計	490	13,252	(1,487)	192	204	-12
331-A	北海道(道央)	77	2,669	(183)	58	26	32
331-B	北海道(道北･道東)	91	2,608	(105)	52	33	19
331-C	北海道(道南)	59	1,865	(163)	45	22	23
331	計	227	7,142	(451)	155	81	74
332-A	青森	68	1,862	(144)	34	19	15
332-B	岩手	54	2,129	(514)	36	16	20
332-C	宮城	79	1,492	(95)	36	21	15
332-D	福島	77	2,059	(162)	35	17	18
332-E	山形	58	1,888	(171)	30	27	3
332-F	秋田	51	1,351	(193)	13	13	0
332	計	387	10,781	(1,279)	184	113	71
333-A	新潟	79	2,899	(203)	41	27	14
333-B	栃木	57	1,412	(269)	15	7	8
333-C	千葉	134	3,516	(512)	42	52	-10
333-D	群馬	57	2,081	(241)	12	70	-58
333-E	茨城	82	2,949	(276)	44	31	13
333	計	409	12,857	(1,501)	154	187	-33
334-A	愛知	121	5,644	(484)	118	37	81
334-B	岐阜･三重	85	3,860	(293)	62	27	35
334-C	静岡	83	3,280	(73)	64	30	34
334-D	富山･石川･福井	99	4,127	(226)	65	40	25
334-E	長野	53	2,132	(153)	20	13	7
334	計	441	19,043	(1,229)	329	147	182
335-A	兵庫(東)	105	2,785	(389)	38	19	19
335-B	大阪･和歌山	199	6,297	(662)	76	46	30
335-C	滋賀･京都･奈良	121	4,223	(300)	77	33	44
335-D	兵庫(西)	67	2,129	(216)	20	13	7
335	計	492	15,434	(1,567)	211	111	100
336-A	徳島･高知･香川･愛媛	155	5,927	(635)	78	55	23
336-B	鳥取･岡山	97	3,307	(259)	46	41	5
336-C	広島	105	3,823	(201)	59	30	29
336-D	島根･山口	103	3,342	(208)	66	39	27
336	計	460	16,399	(1,303)	249	165	84
337-A	福岡･長崎	117	4,596	(483)	86	26	60
337-B	大分･宮崎	79	2,448	(142)	48	14	34
337-C	佐賀･長崎	84	2,997	(390)	40	28	12
337-D	鹿児島･沖縄	82	2,521	(203)	89	37	52
337-E	熊本	57	1,634	(145)	29	16	13
337	計	419	14,196	(1,363)	292	121	171
総計		3,325	109,104	(10,180)	1,766	1,129	637
世界のライオンズの		7.3%	8.3%				

日本ライオンズクラブ分布図

世界のライオンズ

2009.7.31　国際協会集計

ライオンズ国または領域	205
世界のクラブ数	45,663
世界の会員数	1,317,351
期首からの増減	-1,553

国	クラブ数	会員数	期首からの増減
アメリカ	12,734	372,227	-1,726
インド	5,592	174,702	-762
韓国	2,022	83,289	324

OSEAL FORUM

第48回東洋・東南アジア・フォーラム

タイ・パタヤ
2009年11月19日～22日

■主要会場：ロイヤルクリフビーチ・リゾート

■主要日程
※スケジュールは変更になる場合があります

11月19日（木）
- 6:30～12:00 ゴルフ・トーナメント
- 15:00～16:00 第2回ステアリング委員会会議
- 21:00～22:00 コーカス・ミーティング

11月20日（金）
- 8:30～ 9:30 第1回協議会議長と地区ガバナーの会議
- 9:00～17:00 エキシビションとバザール
- 10:00～12:00 国際会長と地区ガバナーの会議
- 11:00～13:00 フード･フェスティバル～タイの味
- 13:30～16:00 開会式
- 17:00～18:00 ジャパン･レセプション

11月21日（土）
- 8:30～ 9:30 第2回協議会議長と地区ガバナーの会議
- 9:00～11:00 レディース・プログラム
- 10:00～11:00 国際第1副会長と第1副地区ガバナーの会議
- 11:00～12:00 国際第2副会長と第2副地区ガバナーの会議
- 13:30～16:00 セミナー／GMT会議
- 20:00～22:00 国際会長晩餐会

11月22日（日）
- 8:30～ 9:30 第3回協議会議長と地区ガバナーの会議
- 10:30～12:00 閉会式

■登録料：1人1万円（現地登録の場合は100ドル）

第48回東洋･東南アジア･フォーラム組織委員会の公式ウェブサイト（下掲）から、登録用紙をダウンロードして、必要事項をご記入の上、第48回オセアルフォーラム事務局日本出張所へ送付してください。

- 個人登録用：http://www.oseal2009.com/download/J_48orient_indi.pdf
- グループ登録用：http://www.oseal2009.com/download/J_48orient_group.pdf
- 登録用紙送付先：〒337-0051埼玉県さいたま市見沼区大宮7-73-19
  第48回オセアルフォーラム（パタヤ）事務局日本出張所
  電話：070-6611-5623　FAX：048-684-7216

ライオン誌10月号
昭和33年12月19日付第三種郵便物認可　定価180円　送料実費76円
2009年(平成21年)9月20日発行　毎月1回20日発行　第52巻第4号
発行所　ライオンズクラブ国際協会ライオン誌日本語版事務所　〒104-0045東京都中央区築地2-2-1　築地細田ビル7階　Tel 03-3542-9571
印刷所　共同印刷株式会社